

國際學術情報流通基盤整備事業
(SPARC Japan)
年報

平成 25(2013)年度

国立情報学研究所

目次

卷頭言	1
1 概要	2
1.1 第4期の活動概要	2
1.1.1 第4期の基本方針	2
1.1.2 第4期事業計画	2
1.2 平成25年度活動	3
1.2.1 SPARC Japan セミナー	3
1.2.2 海外動向調査	3
1.2.3 SCOAP ³ 支援	3
1.2.4 arXiv.org 支援	4
1.2.5 オープンアクセス支援のパイロットプロジェクトの検討	4
1.2.6 日本の学術誌の基礎的情報の把握	4
2 委員会等開催記録	5
2.1 国際学術情報流通基盤整備事業運営委員会	5
2.2 OA ジャーナルへの投稿に関する調査ワーキンググループ	5
3 委員名簿	5
3.1 国際学術情報流通基盤整備事業運営委員会	5
3.2 OA ジャーナルへの投稿に関する調査ワーキンググループ	6
3.3 SPARC Japan セミナーワーキンググループ	7
4 SPARC Japan セミナーの記録	8
5 総合年表	9
6 刊行物一覧	19
6.1 SPARC Japan ニュースレター	19
6.2 SPARC Japan セミナー資料	19
7 資料 ニュースレター再掲	21

卷頭言

平成 15 年から始まった本事業も、第 4 期をむかえ、その一年目を終えたところです。昨年度一年の活動を年報としてまとめましたので、お届けいたします。

振り返ってみると、この間の学術コミュニケーションの動きは大変目まぐるしく、大学図書館の立ち位置も大きく変わりつつあります。しかし、その基調にあるのはオープンアクセス（OA）であり、この大きな課題に対して、我が国の大学図書館を中心としたコミュニティの活動を円滑にかつ先進的に進めることができることが本プロジェクトの狙いとするところです。

平成 25 年度、本プロジェクトは OA を進めるためのフォーラムとしての性格をより鮮明に打ち出しました。その主な活動である SPARC Japan セミナーの運営につきましては、新たに発足したワーキンググループにより企画し運営するという形で行い、計 5 回のイベントを開催しました。ワーキンググループには、図書館職員のみならず研究者や学術出版に携わる広範な識者に加わっていただき、OA 推進の核として活動することができました。第一回には米国 SPARC から Heather Joseph 氏を招待講演に招くことができました。また、様々な分野の研究者からの講演も多く加えるなど、従来欠けていた研究者との距離を縮める努力も顕著に見られました。ご尽力いただいたワーキンググループのメンバーの皆様には改めて感謝の意を表します。

本プロジェクトが重要視する国際連携についても、着実な活動をしております。大学図書館からの更なるご支援をいただければ幸いです。

一方、OA における重要問題として APC 支払いに注目し、大学図書館コンソーシアム連合（JUSTICE）および国立大学図書館協会学術情報委員会と協力し、APC 支払い状況の調査研究を実施しました。今後、大学の APC 支払いに関する問題を議論する際の基礎的なデータとして有益なものとなると思います。さらに、我が国の学術誌の発信力の定点観測のために、NCR に基づいた日本発の研究論文の計量的分析調査も実施しました。

このように SPARC Japan の活動は、OA に関わるコミュニティの様々な活動を支えるものであり、新しい学術コミュニケーションを目指す皆様の厚いご支援を期待しております。

平成 26 年 4 月 1 日
国際学術情報流通基盤整備事業委員長
安達 淳

1 概要

1.1 第4期の活動概要

1.1.1 第4期の基本方針

「国際連携の下でのオープンアクセスの推進、学術情報流通の促進および情報発信力の強化」に取り組むことを基本方針とする。第4期は、大学図書館と研究者の連携を促進するとともに、オープンアクセスの課題を把握し、大学等のるべき対応について検討し、これに関するプロジェクトを推進する。

1.1.2 第4期事業計画

SPARC Japan 第4期の事業は次の3つを柱として計画することが、平成24年度第2回国際学術情報流通基盤整備事業運営委員会で決定した。

(1)国際的なOAイニシアティブとの協調

第3期に引き続き、SPARC、SPARC Europeとの連携を強化するとともに、個別プロジェクトにおいてもSCOAP³、arXiv.org、ORCID、COAR等の国際イニシアティブと協調しつつ国際学術情報流通基盤整備を進める。

(2)オープンアクセスの課題への対応と体制整備

大学図書館と国立情報学研究所の間の連携・協力推進会議と協力しつつ、国際学術情報流通基盤整備を推進する。

世界的に変化の著しいビジネス環境の中で、学術情報流通の変化に学術コミュニティが適切に対応するために、大学図書館・研究者および国立情報学研究所が連携して、オープンアクセスの課題を把握し、大学等のるべき対応について検討する。オープンアクセス誌への対応や機関リポジトリの今後を検討する。

オープンアクセスの課題について検討するために、アドボカシー活動を継続する。国内外の動向の情報収集活動を継続し、SPARC Japanセミナー等で国内に還元する。この活動には、大学図書館、研究者、学会等のコミュニティが主体的に参加できるための場を提供するとともに、速報性を高めた広報も行う。

(3)オープンアクセスに関する基礎的情報の把握

学協会誌に関する定量的・基礎的情報の把握・評価のため、第3期まで実施してきた「日本の学術情報発信状況の調査」を引き続き、継続する。

オープンアクセス誌および機関リポジトリの利用実態や投稿実態について、動向調査を行い、基礎的情報の把握に努める。

1.2 平成25年度活動

1. 1の事業計画のもと、平成25年度は次のプロジェクトを実施した。

1.2.1 SPARC Japanセミナー

アドボカシー活動として、SPARC Japanセミナーを5回実施した。各回に企画担当者を置き、企画・実施し、企画終了後、企画担当者が速報性を重視してニュースレターを発行・ウェブ配信した。

第17号（2013年6月）：SPARCとSPARC Japanの今後

第18号（2013年9月）：人社系オープンアクセスの現在

第19号（2013年11月）：オープンアクセス時代の研究成果のインパクトを再定義する：
再利用とAltmetricsの現在

第20号（2014年1月）：今日の問題を解く、学術情報の受信と発信

—Think Globally, Act Locally

第21号（2014年3月）：アジアを吹き抜けるオープンアクセスの風—過去、現在、未来

1.2.2 海外動向調査

下記の国際会議に参加し、情報収集を行った。

(1)OR2013 (The 8th Annual International Conference on Open Repositories)

(2013/7/8-12 The University of Prince Edward Island)にNII教員2名を派遣した。

(2)ETD 2013 (The 16th International Symposium on Electronic Theses And
Dissertations) (2013/9/23-26香港)にNII職員1名、大学図書館員1名を派遣した。

(3)Berlin11 (Berlin Open Access conferences) (2013/11/19-20 Berlin)にNII教員1名、
大学図書館員1名を派遣した。

(4)SPARC 2014 Open Access Meeting (2014/3/2-4 Kansas)にNII職員1名、大学図書館
員1名を派遣した。

1.2.3 SCOAP³支援

連携・協力推進会議の下のタスクフォースと連携しつつ、SCOAP³の日本のとりまとめを行った。平成25年12月10日にSCOAP³対象誌について購読実績のある大学図書館48機関に対して、SCOAP³への最終参加意向確認を行った結果、参加機関は34機関となった。MOU (Memorandum of Understanding)は平成25年12月4日に、喜連川国立情報学研究所長名義で締結した。MOUでは、SCOAP³のガバナンスや財務、参加機関の権利等について記述されている。なお、ガバナンスのうち、Governing Councilには日本人2名の参加権があるが、安達淳委員長（国立情報学研究所）、野崎光昭委員（高エネルギー加速器研究機構）が参加することになった。また、Executive Committeeには安達委員長（国立情報学研究所）が委員として参加することになった。

2014年1月1日よりSCOAP³対象誌のオープンアクセスを開始している。SCOAP³ Repositoryで論文のオープンアクセス公開も開始されている。（<http://repo.scoop3.org/>）

1.2.4 arXiv.org 支援

arXiv.org の 2013～2017 年会員制モデルへの参加の意向および連絡先を確認し、arXiv.org の事務局と日本の参加機関との連絡調整を行った。13 機関から会員申込みがあつた。

1.2.5 オープンアクセス支援のパイロットプロジェクトの検討

オープンアクセス誌の急速な普及に伴い、APC (Article Processing Charge) の機関負担モデルを実施または検討する出版社が徐々に増えており、海外では既に実施例も存在する。一方、日本においては OA ジャーナルでの論文公表状況や APC 支払い状況が十分に把握できておらず、機関負担等に対応できる状況ではない。そこで、わが国の研究者による OA ジャーナルでの論文公表と APC 支払の実態を把握し、それに基づき、OA ジャーナルの進展のなかでの、図書館の役割の見直しや OA ジャーナルのビジネスモデルの検討に資するために調査を実施した。

調査主体は、NII (SPARC Japan)、大学図書館コンソーシアム連合 (JUSTICE)、国立大学図書館協会学術情報委員会である。

調査は次のとおり実施した。

(1) アンケート調査 (2013 年 12 月 6 日～12 月 26 日)

調査対象を日本の大学・高等教育機関、研究機関等に所属する研究者（大学院生は除く）とし、OA ジャーナルへの投稿論文の多い 44 の機関について、質問紙調査（ウェブサイトでの調査）を実施した。

(2) インタビュー調査 (2013 年 12 月 18 日～12 月 24 日)

予備調査で協力可能と回答のあった機関等を対象にインタビューを実施した。

(3) 文献調査

近年の海外の動向について、文献の翻訳をおこなった。

1.2.6 日本の学術誌の基礎的情報の把握

第 3 期までで学協会誌の発信力を定量的に把握する調査研究は進展した。定期的な調査により、引き続き基礎的情報の把握に努めている。平成 25 年度は、Thomson Reuters 社の NCR-J (National Citation Report for Japan) 2007-2011、JCR (Journal Citation Reports) 2011 及び既往報告書に係る統計データを用い、次の 2 つの調査を実施した。

(1) 日本の研究論文の国際発信の動向に関する計量的分析調査

わが国の研究論文の国際的な刊行状況に関する客観的な状況を把握するため、SPARC Japan では平成 22 年度に計量調査を行い、「日本の学術論文と学術雑誌の位置付けに関する計量的調査分析」(2010 年 12 月) を発行している。

学術雑誌に係る現状と課題を把握して今後の方策を検討するため、日本の学術研究論文について、主要国際学術誌の発行国別の掲載論文数とその構成比と、日本の研究者の論文の雑誌別掲載数とその発行国別構成比に係る調査分析を行った。

(2) 主要な高エネルギー物理学雑誌における日本の論文の掲載状況に関する統計分析調査

SCOAP³の事業の効果的推進のために、SCOAP³ 対象誌におけるわが国の研究論文の掲載状況に関する統計的な諸指標の析出を目的として調査を実施した。SCOAP³の対象雑誌12誌における日本の論文の数と全体での比率と、それら論文の我が国的主要機関別の数と構成比に係る分析を行った。

2 委員会等開催記録

2.1 国際学術情報流通基盤整備事業運営委員会

開催日	議題	特記事項
第1回 平成26年3月24日	1. 平成25年度 SPARC Japan 事業の実施報告【報告】 2. SPARC 2014 Open Access Meeting について【報告】 3. オープンアクセスジャーナルへの投稿に関する調査について【報告】 4. 平成26年度 SPARC Japan の活動計画について【審議】	

2.2 OAジャーナルへの投稿に関する調査ワーキンググループ

開催日	議題	特記事項
第1回 平成25年8月6日	1. APC 調査主旨説明 2. 調査内容およびスケジュールについて (1) 調査「研究者に対するアンケート調査」と「ケーススタディ調査」(国内状況調査と国外状況調査)を3件行う (2) 作業分担について (3) スケジュール確認	
第2回 平成25年10月2日	1. 調査1(研究者に対するアンケート調査)予備調査について 2. 同上 アンケート調査対象、項目等について 3. 調査2(ケーススタディー調査)の進め方について	
第3回 平成26年3月13日	1. 報告書目次(案)および今後の進め方について 2. 調査1(研究者に対するアンケート調査)のまとめについて 3. 調査2(インタビュー調査)のまとめについて 4. 調査2(文献調査)のまとめについて (1) 報告書目次(案)および今後の進め方について (2) 報告書の構成について	

3 委員名簿

3.1 国際学術情報流通基盤整備事業運営委員会

氏名	所属・役職	備考
逸村 裕	筑波大学 図書館情報メディア系教授	1号委員 (研究教育職員)
野崎 光昭	高エネルギー加速器研究機構 教授	1号委員 (研究教育職員)
今井 浩	東京大学大学院 情報理工学系研究科教授	1号委員 (研究教育職員)
関川 雅彦	東京大学附属図書館 事務部長	2号委員 (大学図書館関係者)

阿部 修人	一橋大学経済研究所 教授	1号委員 (研究教育職員)
倉田 敬子	慶應義塾大学 文学部教授	1号委員 (研究教育職員)
関 秀行	慶應義塾大学メディアセンター 本部課長	2号委員 (大学図書館関係者)
土屋 俊	独立行政法人 大学評価・学位授与機構 教授	1号委員 (研究教育職員)
林 和弘	科学技術政策研究所 科学技術動向研究センター 上席研究官	3号委員 (学会の関係者)
森 重文	京都大学数理解析研究所長	1号委員 (研究教育職員)
柄谷 泰文	京都大学附属図書館 事務部長	2号委員 (大学図書館関係者)
安達 淳	国立情報学研究所 学術基盤推進部長	委員長
尾城 孝一	国立情報学研究所 学術基盤推進部次長	

3.2 OAジャーナルへの投稿に関する調査ワーキンググループ

氏名	所属・役職
佐藤 義則	東北学院大学 文学部教授
金藤 伴成	東京大学附属図書館 情報サービス課相互利用係長
砂押 久雄	東京工業大学 研究推進部情報図書館課情報管理グループ長
今村 昭一	早稲田大学図書館 情報管理課長
三根 慎二	三重大学 人文学部文化学科講師
井上 敏宏	京都大学附属図書館 情報管理課課長補佐
相原 雪乃	国立情報学研究所 学術基盤推進部学術コンテンツ課長
高橋 菜奈子	国立情報学研究所 学術基盤推進部学術コンテンツ課副課長

3.3 SPARC Japan セミナーワーキンググループ

氏名	所属・役職
行木 孝夫	北海道大学大学院 理学研究院准教授
内島 秀樹	筑波大学附属図書館 情報管理課長
谷藤 幹子	独立行政法人 物質・材料研究機構(NIMS) 科学情報室長
有田 正規	国立遺伝学研究所 生命情報研究センター教授
松原 恵	東京大学情報システム部 情報基盤課学術情報チームデジタル・ライブラリ 担当係員
福田 名津子	一橋大学附属図書館 研究開発室専門助手
島田 貴史	慶應義塾大学 メディアセンター本部
今村 昭一	早稲田大学図書館 情報管理課長
西脇 亜由子	明治大学 学術・社会連携部生田図書館事務室
林 和弘	科学技術政策研究所 科学技術動向研究センター 上席研究官
永井 裕子	公益社団法人 日本動物学会事務局 事務局長 / UniBio Press 代表
桑原 真人	一般社団法人日本物理学会 公益社団法人応用物理学会 物理系学術誌刊行センター
北村 由美	京都大学附属図書館 研究開発室准教授
東出 善史子	京都大学附属図書館 情報管理課電子情報掛
西薙 由依	鹿児島大学学術情報部 情報管理課学術コンテンツ係

4 SPARC Japanセミナーの記録

平成25年度SPARC Japanセミナー実施記録

回	実施日	テーマ	講師(所属)	形態	参加人数
1	平成25年6月7日(金) 13:30~17:00 (一橋大学 一橋講堂)	SPARCとSPARC Japanのこれから	oHeather Joseph (Executive Director、SPARC) o尾城 孝一 (国立情報学研究所) o戸瀬 信之 (日本数学会) o関川 雅彦 (東京大学附属図書館) o林 和弘 (科学技術政策研究所)	オープン	239
2	平成25年8月23日(金) 13:00~17:00 (NII 12階会議室)	人社系オープンアクセスの現在	o青木 玲子 (一橋大学経済研究所) o石居 人也 (一橋大学大学院) oMartin Paul Eve (Open Library of Humanities) o鈴木 哲也 (京都大学学術出版会) o能名 邦楨 (神戸大学大学院) o松本 和子 (慶應義塾大学理工学メディアセンター)	オープン	95
3	平成25年10月25日(金) 10:00~17:00 (NII 12階会議室)	オープンアクセス時代の研究成果のイ ンパクトを再定義する: 再利用と Altmetricsの現在	o西園 由依 (鹿児島大学附属図書館/DRF) o池内 有為 (筑波大学大学院) oMark Hahnel (figshare) oJason Priem (ImpactStory) o方農 季雅 (ライフサイエンス総合データベースセンター) o大園 隼彦 (岡山大学附属図書館/DRF) o林 和弘 (科学技術・学術政策研究所)	オープン	107
4	平成25年12月19日(木) 13:00~17:00 (京都大学百周年記念館2階 国際交流ホールIII)	今日の問題を解く、学術情報の受信と 発信—Think Globally, Act Locally	o東出 善史子 (京都大学附属図書館情報管理課電子情報掛) o谷藤 幹子 (京都大学附属図書館情報管理課電子情報掛) o塩野 浩介 (京都大学附属図書館情報管理課電子情報掛) o田辺 泰啓 (京都大学附属図書館情報管理課電子情報掛) o村山 光昭 (京都大学附属図書館情報管理課電子情報掛) o高橋 昭治 (京都大学附属図書館情報管理課電子情報掛) o飯野 勝則 (佛教大学附属図書館) o鈴木 哲也 (京都大学学術出版会) o有田 正規 (国立遺伝学研究所 生命情報研究センター) o北村 美樹 (京都大学附属図書館研究開発室) o杉田 茂樹 (千葉大学附属図書館/DRF) oChoi Honam (Korea Institute of Science and Technology Information)	オープン	63
5	平成26年2月7日(金) 13:00~17:15 (NII 12階会議室)	アジアを吹き抜けるオープンアクセス の風—過去、現在、未来	oDavid Palmer (The University of Hong Kong Libraries) oPaul Kratska (NUS Press, National University of Singapore) o土屋 俊 (大学評議・学位授与機構) o加藤 信哉 (筑波大学附属図書館) o尾城 孝一 (国立情報学研究所)	オープン	77
合計					581
平均					116

5 総合年表

年度	主催イベント	その他のイベント
平成15 (2003)	06/25 第1回評議会 運営委員会 07/14 事業参画提案の募集開始	07/02 学協会向け事業説明会（於：日本教育会館）
08/01	第1回運営委員会	08/19 事業説明会（於：東北大學 東北大学附属図書館との共催）
09/11	第2回運営委員会	
09/17	第2回評議会（事業参画提案決定） 記者発表	
10/08	作業グループ合同会議	
		11/05 第5回図書館総合展フォーラム「SPARC/JAPAN：日本の国際学術コミュニケーションの変革」開催（於：東京国際フォーラム 国立大学図書館協議会・私立大学図書館協会主催）
		11/20 国立大学図書館協議会電子ジャーナルタスクフォース（生物系、物理系、医学系の譲読交渉）
01/21-29	Project Euclid 説明会（於：学術総合センター、東北大學、京都大学、名古屋大学）	
02/23	SPARC/JAPAN 繼続会：参加学会への成果報告、新雑誌創刊構想説明（於：学術総合センター）	
03/11	SPARC/JAPAN セミナー：生物系学会誌をめぐる学術情報流通体制の将来 -UniBio Press のめざすもの-（於：東京大学附属図書館）	
03/22	第3回運営委員会	
03/23	第3回評議会	
平成16 (2004)	05/28 第1回運営委員会 06/02 第1回評議会 06/07 参画提案募集開始 09/15 第2回運営委員会	07/01 国立大学図書館協議会総会ワークショップ：「国際学術情報流通基盤整備事業の活動」（於：大阪大学コンベンションセンター） 07/07 学協会向け事業説明会（於：学術総合センター）

	09/22 第2回評議会（事業参画提案選定）	09/27 Project Euclid懇談会（Project Euclidへの参画に関する技術的打ち合わせ、DPubSについての説明） 10/15 シンポジウム：学会出版と学術コミュニケーション活動の変革～SPARC/JAPANを事例として～（於：広島大学中央図書館 広島大学図書館、国立情報学研究所、国立大学図書館協会国際 学術コミュニケーション委員会共催） 10/19 緊急シンポジウム「どうする日本の学術誌！」（於：早稲田 大学総合学術情報センター（社）高分子学会、（社）電子情 報通信学会、東北数学雑誌編集委員会、（社）日本機械学会、（社） 日本金属学会、（社）日本動物学会、（社）日本分析化学会、日 本哺乳動物学会、日本哺乳類学会、国立情報学研究所共催） 11/05 OUP懇談会「Open Accessの現状について」 11/25 第6回図書館総合展フオーラム「学術コミュニケーションの最 先端：オープン・アクセスとセルフアーカイブ」（於：パシフ イコ横浜） 01/27 ワークショップ「電子ジャーナルのビジネスモデル構築と学術 出版をめぐる動向」（於：日本教育会館）	10/19-20 Project Euclid DPubS Conferenceに参加（於：コネル大 学）
平成17 (2005)	03/07 第3回運営委員会 03/10 第3回評議会 06/06 第1回運営委員会 06/08 第1回評議会	03/24 シンポジウム「SPARCの現状と課題：学術雑誌・機関レポジ トリ・オープン・アクセス」（於：早稲田大学） 05/19 SPARC/JAPAN連続セミナー第1回「Natureの歴史、今、未 来を語る—Natureの編集方針」 06/29 SPARC/JAPAN連続セミナー第2回「電子接稿査読システム とは何か—今、日本で使えるシステム」JST「J-STAGE」投稿 査査システム」 07/09-10 電子ジャーナル利用の現在と未来に関するクローズド・ワー クショップ（於：経団連ゲストハウス、静岡） 07/15 SPARC/JAPAN連続セミナー第3回「オープン・アクセスの 理念と実践－研究者・図書館・学術誌」	06/21-22 JISC International Solutions for the Dissemination of Researchに出席、討議（ロンドン） 07/07-08 エルゼビア・ライブリ・コネクト・セミナー2005「ユー ザーを理解する（Understanding Users）」（於：京都・東京、 エルゼビア・ジャパン主催、NII後援）

	07/20 UniBio Press の挑戦－学会の新しいビジネスモデル（於：茨城大学 茨城大学図書館主催）	09/15 山口大学図書館セミナー2005「日本の電子ジャーナルの現況」学術コミュニケーションの今日：SPARC/JAPAN の挑戦（於：山口大学学術情報機構図書館主催）
09/22	SPARC/JAPAN 連続セミナー第4回「電子ジャーナルを作成し、どう公開するか－学会、企業の試み」	09/16 京都大学学術情報・電子ジャーナルシンポジウム「[「大学における学術情報資源の整備－電子ジャーナル時代の学術コミュニケーションの変革－」（於：京都大学 京都大学附属図書館とNIIの共催）
10/06	SPARC/JAPAN 連続セミナー第5回「主体である研究者は何をすべきか－電子ジャーナル時代を迎えて」（於：つくば国際会議場社団法人日本動物学会第76回大会開催シンポジウムとの共催）	
10/13	第2回運営委員会	
10/26	第2回評議会（事業参画提案選定）	
11/24	SPARC/JAPAN 連続セミナー臨時回「Journal of Bioscience and Bioengineering WEB投稿審査システム」説明会・デモンストレーション	
11/30	SPARC/JAPAN 連続セミナー第6回「第7回図書館総合展フオーラム COUNTER プロジェクト：オンライン利用統計の国際標準について」（於：パシフィコ横浜）	
12/01	COUNTER プロジェクトに関するクローズド・ワークショッピング	12/09 長崎大学附属図書館連続講演会第二回講演会「学術情報発信の新しい動向」：SPARC/JAPAN の活動と課題（於：長崎大学附属図書館主催）
12/12	SPARC/JAPAN 連続セミナー第7回「日本の学術誌における英文校閲を考える」	
01/31	SPARC/JAPAN 連続セミナー第8回「学術情報流通をめぐる最近の動向と技術標準：Google Scholar、CrossRef、OAI-PMH、etc.」	
02/10	SPARC/JAPAN 連続セミナー第9回「SPARC/JAPAN 選定誌によるラッパアップセッション」	
02/15	第3回運営委員会	
02/24	第3回評議会	
平成18 (2006)		
	06/30 SPARC Japan 連続セミナー2006第1回「海外商業出版社から見た日本の学術コミュニケーション」	03 米国研究図書館協会（ARL）とMOUを締結
	07/26 SPARC Japan 連続セミナー2006第2回「e-Journalの版権と	07/03-04 エルゼビア・ライブリ・コネクト・セミナー2006「From “Search” to “Find”～必要な情報を見つけやすい環境づくり～」（於：東京・大阪、エルゼビア・ジャパン主催、NII後援）

		ライセンシング：海外の状況と海外市場における日本ジャーナルの展望】
09/08	第1回運営委員会	09/05 Sally Morris 氏講演会「Introducing ALPSP」
09/29		09/29 SPARC Japan 連続セミナー2006 第3回 「Web 投稿審査システムの検証：ビフォーアフター」
11/02		11/02 SPARC Japan 連続セミナー2006 第4回 「大学図書館から学術出版社への要望：COUNTER を例にして」
11/20		11/20 第8回図書館総合展フォーラム 「TRANSFER—出版社間のジャーナル移行に伴う問題点とその解決に向けて」(於：ビジネス横浜)
12/14		12/14 SPARC Japan 連続セミナー2006 第5回 「著作権：学会の権利、著者の権利、機関リポジトリへの対応」
12/18-19		12/18-19 「デジタル巨人の肩の上に立つ」機関リポジトリ、e-サイエンス、および学術コミュニケーションの将来に関する国際シンポジウム (於：都市センターホール)
01/30	第2回運営委員会	01/30 SPARC Japan 連続セミナー2006 第6回 「e-Journal の販売とライセンシング(2)- 販売のプロに学ぶ成功の秘訣」
03/05		03/05 SPARC Japan 連続セミナー2006 第7回 「計量・書誌学からジャーナル・論文のパフォーマンスを測る」
平成19 (2007)		05/15 UniBio Press セミナー「生物系ジャーナルの挑戦—より明確に、より広く、その情報を伝えるために」(於：学術総合センター UniBio Press 主催)
06/12	ペートナー誌合会議	05/17 UniBio Press セミナー「生物系ジャーナルの挑戦—より明確に、より広く、その情報を伝えるために」(於：京都大学附属図書館 UniBio Press 主催)
07/19	第1回運営委員会	07/17 SPARC Japan 連続セミナー2007 第1回 「計量・書誌学からジャーナル・論文のパフォーマンスを測る・2」
08/05-11		08/05-11 41th IUPAC (International Union of Pure and Applied Chemistry) 化学会議出展 (トリノ)
08/20-22		08/20-22 234th ACS 秋季大会出展 (ボストン)

		10/02 SPARC Japan 連続セミナー2007 第2回 「Web 投稿審査システムの検証パート3 稿より良いシステムを目指してー」	
	11/02	SPARC Japan 連続セミナー2007 第3回 「メタデータ Publishing の現在—電子ジャーナル主体の製作・出版に必要なもの」	11/07-09 第9回図書館総合展 出展（於：パシフィコ横浜）
	11/09	第9回図書館総合展ブレゼンテーション「日本の英文トップ電子ジャーナルの挑戦—図書館総合展ブレゼンテーションパートナーからの提案ー」（於：パシフィコ横浜）	
12/14	「SPARC Japanパートナー誌のコソソーシア購入に向けて」	SPARC Japan ALPSP 特別セミナー（第4回 SPARC Japan 連続セミナー2007）「学術出版と学会 Journal Publishing and Scholarly Societies」	
	01/18	ALPSP トレーニングコース「Introduction to Journal Publishing」	
平成 20 (2008)	02/29	第2回運営委員会	
	04/22	SPARC Japan セミナー2008 第1回 「研究成果発表の手段としての学術誌の将来」	06/15-17 SLA (Special Libraries Association 米国専門図書館協会) 年次総会 出展（シアトル）
	06/24	SPARC Japan セミナー2008 第2回 「学術出版と XML 対応-日本の課題」	06/26 第55回国立大学図書館協会総会 出展（於：東北大学）
	07/10	SPARC Japan セミナー2008 第3回 「韓国コンソーシアム事情 - 海外展開を目指して -」	07/13-15 中国化学会学術年会 出展（於：天津）
	08/17-19	236th ACS National Meeting & Exposition 出展（於：フィラデルフィア）	08/17-19 236th ACS National Meeting & Exposition 出展（於：フィラデルフィア）
	09/02-03	RIMS 研究集会（第4回 SPARC Japan セミナー2008）「紀要の電子化と周辺の話題」（於：京都大学数理解析研究所 京都大学数理解析研究所主催）	09/11-12 私立大学図書館協会総会 出展（於：國學院大學）
	09/16-20	2nd EuCheMS Chemistry Congress 出展（於：トリノ）	09/16-20 2nd EuCheMS Chemistry Congress 出展（於：トリノ）
	09/25-26	KESLI (Korean Electronic Site License Initiative) 電子情報 EXPO での発表、出展（於：大田）	09/25-26 KESLI (Korean Electronic Site License Initiative) 電子情報 EXPO での発表、出展（於：大田）
	10/12-15	15th North American ISSX (International Society for the Study of Xenobiotics) Meeting の広報（於：サンディエゴ）	10/12-15 15th North American ISSX (International Society for the Study of Xenobiotics) Meeting の広報（於：サンディエゴ）
	10/14	SPARC Japan セミナー2008 Open Access Day 特別セミナー「日本における最適なオープン・アクセスとは何か？」	

		10/27-30 ISAP2008 (International Symposium on Antennas and Propagation) 出展 (於：台湾)
	11/17-18 SPARC Digital Repositories Meeting 2008 (於：ボルチモア SPARC、SPARC Europe、SPARC Japan 共同主催)	11/13-14 INFOPRO2008 プロダクトレビュー参加・出展 (於：日本科学未来館)
11/25	SPARC Japan セミナー2008 第6回「IFを越えて・さらなる研究評価の在り方を考える」	
11/27	SPARC Japan セミナー2008 第7回（第10回図書館総合展・学術情報オープンサミット2008 フォーラム）「Open Access Update」	12/17-20 EUC2008 (International Conference On Embedded and Ubiquitous Computing) 出展 (於：上海)
12/16	SPARC Japan セミナー2008 第8回「日本で使える電子ジャーナルプラットフォーム」	
01/22-26	Project Euclidと数学系ジャーナルの打ち合せ (於：国立情報学研究所、京都大学、東京工業大学)	
02/13	SPARC Japan セミナー2008 第9回「SPARC Japan 選定誌がやってきたこと」	03/16-20 APS March Meeting 2009 (米国物理学年会) 出展 (於：ピッツburgh)
12/24	第1回運営委員会	
03/10	第2回運営委員会	
03/27	パートナー誌合同会議	06/25 SPARC Japan セミナー2009 第1回「研究者は発信する－多様な情報手段を用い、社会への拡がりを求めて」
03/27	第3回運営委員会	08/04 SPARC Japan セミナー2009 第2回「非営利出版のサステイナビリティとは－OUPに学ぶ」
平成21 (2009)		09/08-09 RIMS 研究集会（第3回 SPARC Japan セミナー2009）「数学におけるデジタルライブラー構築へ向けて－研究分野間の協調のもとに」
10/05	第1回運営委員会	09/17 日本動物学会大会（第4回 SPARC Japan セミナー2009）「ZSプロジェクトについて」
		10/20 Open Access Week（第5回 SPARC Japan セミナー2009）「オープンアクセスのビジネスモデルと研究者の実際」
		11/11 第6回 SPARC Japan セミナー2009（第11回図書館総合展）

	学術情報オーブンサミット2009 フォーラム) [NIH Public Access Policy とは何か]	11/25 第9回アジア太平洋生物化学工学会議 (APBioChEC 2009)に SPARC Japan の化学系パートナー誌が出席 12/03-04 DRFIC 2009 デジタルリポジトリ連合国際会議 2009(於: 東京工業大学 DRF (デジタルリポジトリ連合) と NII の共催)
12/11 02/02 02/03	第7回 SPARC Japan セミナー2009「人文系学術誌の現状—機関リポジトリ、著作権、電子ジャーナル」 第8回 SPARC Japan セミナー2009 [Marketing to Libraries Worldwide] ALPSP トレーニングコース [Effective Journals Marketing]	
03/23	第2回運営委員会	
平成22 (2010)	06/23 第1回 SPARC Japan セミナー2010「学会の仕事とその経営 を知る」 07/06 第2回 SPARC Japan セミナー2010 「ジャーナル出版—海外 学会の現状」 08/24 第3回 SPARC Japan セミナー2010 「図書館の仕事を知る - 学術雑誌の購読と利用-」 09/16 第4回 SPARC Japan セミナー2010 (RIMS 研究集会) 「数学におけるデジタルライブラリー構築へ向けて」 09/24 第5回 SPARC Japan セミナー2010 (社団法人 日本動物学会 第81回大会) 「日本の学術情報流通 10年後を見据えて」 10/20 第6回 SPARC Japan セミナー2010 Open Access Week 「日本発オープンアクセス」	08/19 International Congress of Mathematicians (国際数学者会議) に出席 08/22- 26 American Chemical Society (ACS) 2010年 秋季大会に出 展 08/29-09/02 3rd EuCheMS Chemistry Congress (第3回ヨーロッパ 化学会議) に出席

		11/08-09 SPARC Digital Repositories Meeting (デジタルリポジトリ会議) (於：ボルチモア SPARC、SPARC Europe、SPARC Japan 共催)
12/10	シンポジウム 「大学からの研究成果オープンアクセス化方針を考える」(於：東京大学 国立大学図書館協会とNIIの共催)	
01/14	第7回 SPARC Japan セミナー2010 「著者IDの動向」	
02/03	第8回 SPARC Japan セミナー2010 「世界における”日本の論文／日本の学術誌”のインパクト」	
03/08	TIB (ドイツ技術情報図書館) / ZB MED (ドイツ医学中央図書館) / NII (国立情報学研究所) MoU 締結記念講演会 「ドイツと日本における学術情報流通基盤の未来」(於：学術総合センター 東京ドイツ文化センターとの共催)	
03/16	第1回運営委員会	
平成23 (2011)		08/28-09/01 American Chemical Society (ACS) Fall 2011 National Meeting & Exposition (第242回国米国化学会秋季大会) に出席(於：デンバー)
10/06	第1回運営委員会	09/04-09 14th Asian Chemical Congress 2011 (14ACC) (第14回アジア化学会議) に出席(於：バンコク)
		10/26 2011 Open Access Korea(OAK) Conferenceでの発表(於：ソウル)
10/28	第1回 SPARC Japan セミナー2011 「OA出版の現況と戦略 (ジャーナル出版の側から)」	
12/06	第2回 SPARC Japan セミナー2011 「今時の文献管理ツール」ワークショップ	
01/31	第3回 SPARC Japan セミナー2011 「学術情報流通の新たな展開－研究者・学会とオープンアクセス－」	
02/10	第4回 SPARC Japan セミナー2011 「学術情報流通の未来を切り開く－電子ジャーナルの危機とオープンアクセス－」	
02/29	第5回 SPARC Japan セミナー2011 「OAメガジャーナルの興奮」	

		03/26 第6回 SPARC Japan セミナー2011「数学出版に関するワークショップ」(於：東京理科大学 Project Euclid 主催、日本数学会共催ワークショップ)
平成24 (2012)		<p>05/25 第1回 SPARC Japan セミナー2012「学術評価を考える」</p> <p>06/19 第2回 SPARC Japan セミナー2012「ジャーナルの発展をもとめて～プラットフォーム移築を中心にして～」</p> <p>07/25 第3回 SPARC Japan セミナー2012「平成25年度 科学研究費補助金（研究成果公開促進費）改革」</p> <p>08/23 第4回 SPARC Japan セミナー2012「研究助成機関が刊行するオープンアクセス誌」</p> <p>10/26 第5回 SPARC Japan セミナー2012「Open Access Week – 日本におけるオープンアクセス、この10年これから10年」</p> <p>12/04 第6回 SPARC Japan セミナー2012「オープンアクセスによって図書館業務はどう変わるので図書館のためのオープンアクセス講座～」</p> <p>02/19 第7回 SPARC Japan セミナー2012「図書館によるオープンアクセス財政支援」</p>
		07/02-07 European Congress of Mathematics (ECM) に出席 (於：グラフ、ボーランド)
		08/19-21 American Chemical Society (ACS) Fall 2012 National Meeting & Exposition (第244回国際化学会秋季大会) に出席 (於：フィラデルフィア)
12/10 第1回運営委員会	03/26 第2回運営委員会	08/26-30 4th EuCheMS Chemistry Congress (第4回ヨーロッパ化学会議) に出席 (於：ブラハ)
		12/26-27 RIMS 共同研究 研究会にて基調講演 (於：京都大学)

平成 25 (2013)	
06/07	第 1 回 SPARC Japan セミナー-2013 「SPARC と SPARC Japan のこれから」
08/23	第 2 回 SPARC Japan セミナー-2013 「人社系オープンアクセスの現在」
10/25	第 3 回 SPARC Japan セミナー-2013 「オープンアクセス時代の研究成果のインパクトを再定義する：再利用と Altmetrics の現在」
12/19	第 4 回 SPARC Japan セミナー-2013 「今日の問題を解く、学術情報の受信と発信—Think Globally, Act Locally」
02/07	第 5 回 SPARC Japan セミナー-2013 「アジアを吹き抜けれるオープンアクセスの風-過去、現在、未来」
03/24	第 1 回運営委員会
08/06	第 1 回 OA ジャーナルへの投稿に関する調査ワーキング グルーブ開催
10/02	第 2 回 OA ジャーナルへの投稿に関する調査ワーキング グルーブ開催
12/04	SCOAP ₃ と MOU を締結
01/27	RIMS 共同研究 研究会にて基調講演 (於：京都大学)
03/02	COAPI Meeting へ参加 (於：カンザスシティ)
03/03-04	SPARC2014 Open Access Meeting 本会議への参加 (於：カンザスシティ)
03/13	第 3 回 OA ジャーナルへの投稿に関する調査ワーキング グルーブ開催

6 刊行物一覧

6.1 SPARC Japan ニュースレター

- ・SPARC Japan NewsLetter 第 17 号 (2013 年 6 月)

<http://www.nii.ac.jp/sparc/publications/newsletter/PDF/sj-NewsLetter-17.pdf>

- ・SPARC Japan NewsLetter 第 18 号 (2013 年 9 月)

<http://www.nii.ac.jp/sparc/publications/newsletter/PDF/sj-NewsLetter-18.pdf>

- ・SPARC Japan NewsLetter 第 19 号 (2013 年 11 月)

<http://www.nii.ac.jp/sparc/publications/newsletter/PDF/sj-NewsLetter-19.pdf>

- ・SPARC Japan NewsLetter 第 20 号 (2014 年 1 月)

<http://www.nii.ac.jp/sparc/publications/newsletter/PDF/sj-NewsLetter-20.pdf>

- ・SPARC Japan NewsLetter 第 21 号 (2014 年 3 月)

<http://www.nii.ac.jp/sparc/publications/newsletter/PDF/sj-NewsLetter-21.pdf>

6.2 SPARC Japan セミナー資料

<http://www.nii.ac.jp/sparc/event/2013/20130607.html>

【第 1 回 SPARC Japan セミナー 2013】(平成 25 年 6 月 7 日)

「SPARC と SPARC Japan のこれから」

"Open Access: Delivering on the Promise" Heather Joseph (Executive Director, SPARC)

「SPARC Japan ～来し方行く末～」尾城 孝一 (国立情報学研究所)

「SPARC への期待」戸瀬 信之 (日本数学会)

<http://www.nii.ac.jp/sparc/event/2013/20130823.html>

【第 2 回 SPARC Japan セミナー 2013】(平成 25 年 8 月 23 日)

「人社系オープンアクセスの現在」

「概要説明」島田 貴史 (慶應義塾大学メディアセンター本部)

「経済学と経済学者にとってのオープンアクセス」青木 玲子 (一橋大学経済研究所)

「歴史学の研究手法・環境とオープンアクセス—日本近現代史研究の現場から—」

石居 人也 (一橋大学大学院)

「海外の動向：人社系 OA 誌の最前線」Martin Paul Eve (Open Library of Humanities)

「「学術情報」と「体系的な知」のはざまで—大学出版の模索」鈴木 哲也 (京都大学学術出版会)

<http://www.nii.ac.jp/sparc/event/2013/20131025.html>

【第 3 回 SPARC Japan セミナー 2013】(平成 25 年 10 月 25 日)

「オープンアクセス時代の研究成果のインパクトを再定義する：再利用と Altmetrics の現在」

「概要説明」 西薗 由依（鹿児島大学附属図書館/DRF）

ビデオレター Mark Patterson (eLife), Peter Binfield (PeerJ)

「英国における研究データ管理支援の動向」 池内 有為（筑波大学大学院）

"The "Reuse Factor" and the Future of Credit for Research"

Mark Hahnel (figshare)

"Altmetrics: The Next Step for Open Access" Jason Priem (ImpactStory)

「生命科学分野の大規模データ利用技術開発の現状と今後の展開」 坊農 秀雄（ライフサイエンス統合データベースセンター）

「岡山大学学術成果リポジトリにおける Altmetrics の導入について」 大園 隼彦（岡山大学附属図書館/DRF）

<http://www.nii.ac.jp/sparc/event/2013/20131219.html>

【第4回 SPARC Japan セミナー 2013】（平成25年12月19日）

「今日の問題を解く、学術情報の受信と発信—Think Globally, Act Locally」

「概要説明」 谷藤 幹子（物質・材料研究機構）

「京都大学における E リソース管理の現状と課題」 塩野 真弓（京都大学附属図書館）

「NIMS 材料科学図書館における電子リソース管理システムの開発と実践」

田辺 浩介（物質・材料研究機構）

「学会誌 OA 化への決断—科研費助成を受けて購読モデルから OA モデルへ」

村山 泰啓（情報通信研究機構）

「学会誌 OA 化を実践してわかったこと — 研究コミュニティからのメッセージ」

野崎 光明（高エネルギー加速器研究機構）

<http://www.nii.ac.jp/sparc/event/2013/20140207.html>

【第5回 SPARC Japan セミナー 2013】（平成26年2月7日）

「アジアを吹き抜けるオープンアクセスの風—過去、現在、未来」

「概要説明」 杉田 茂樹（千葉大学附属図書館/DRF）

"OA Activities in Korea" Choi Honam (Korea Institute of Science and Technology Information)

"OA & IR in 2012; The University of Hong Kong & Greater China"

David Palmer (The University of Hong Kong Libraries)

"Open Access in Southeast Asia: Unresolved Issues and New Opportunities"

Paul Kratoska (NUS Press, National University of Singapore)

「「アジア」の OA の将来」 土屋 俊（大学評価・学位授与機構）

7 資料 ニュースレター再掲



SPARC Japan

NewsLetter

NO.17 2013年6月

■ 第1回 SPARC Japan セミナー 2013 「SPARCとSPARC Japan のこれから」

2013年6月7日(金) 一橋講堂 参加者:239名

第1回目の SPARC Japan セミナーは「オープンアクセス・サミット 2013 学術情報のオープン化に向けて～現在の到達点と未来の展望～」(平成25年6月6日～7日)の一環として、第4期 SPARC Japan の活動をスタートさせるにふさわしく SPARC North America の Executive Director である Heather Joseph 氏をお招きし、6月7日(金)に開催しました。各講演内容は下記のとおりです。なお、詳細は SPARC Japan の web をご覧ください。

(<http://www.nii.ac.jp/sparc/event/2013/20130607.html>)

【Open Access: Delivering on the Promise】

Heather Joseph (SPARC North America)

基調講演として、米国 SPARC 活動状況や Open Access(以下 OA)について、以下の3つの側面について取り上げられた。

1. 学術情報流通におけるプレッシャー
 - 1-1. インターネットやテクノロジーの進歩による新しいネットワークツールの出現
 - 1-2. 電子情報の氾濫
 - 1-3. 図書館予算の圧迫
2. OA の考え方「Open Access= Access + Reuse」の再確認と、実現のための取組み・成果
 - 2-1. OA ジャーナルの急激な増加と OA 出版を選択する著者の増加
→健全に成長しており、持続可能性だけでなく採算性もあることが明らかに。
 - 2-2. OA リポジトリの進展
→コンテンツ数の増加と内容の充実。
 - 2-3. 著作権とライセンスの問題
→OA 下の Access と Reuse を実現するため、従来のライセンスに柔軟性をもたせる。
 - 2-4. OA ポリシー
→大学等で制定されるものと、国家・助成団体により制定されるものがある。OA 義務化等、OA に対する意識や期待の高まりが反映される。
3. 新しい OA のコンセプトを実現するため、新しいシステムにおける課題や問題点
 - ライセンスの問題(完全に再利用可能な著作権の確立)が最も重要であり、現在広がりつつある様々な論文単位の評価指標(ALMs: Article Level Metrics)をさらに普及させ、よりオープンな学術コ

ミュニケーションの確立と、そうした環境に適した学術文化を促進していく必要がある。

今後も SPARC 活動はグローバルな連携と共同活動によってさらなる発展を目指していきたい。

【SPARC Japan～来し方行く末～】

尾城 孝一 (国立情報学研究所)

SPARC Japan の誕生から将来についての展望を解説された。

米国の SPARC と比較すれば、学術コミュニケーションの主体を研究者の側に取り戻すことを一つの目的とし、商業出版社の寡占化による価格高騰へ対抗する米国 SPARC に対し、SPARC Japan では、まず日本の学協会等が刊行する学術雑誌の電子化を支援すること、日本特有の問題を解決することが目的だった。

第1期から第3期までは比較的順調に問題解決への取組みと情報の共有を進めてきたが、大学図書館との連携やオープンアクセス化への対応という課題が残った。この課題のもとに、次期は国際的なオープンアクセスイニシアチブとの協調をはじめとする体制整備を計画する。特に、Article Processing Charge の機関負担モデルを調査検討し、大学図書館との連携を強めたい。

【SPARC への期待】

戸瀬 信之 (日本数学会)

日本数学会の出版事業と周辺の話題について、SPARC Japan への期待とともに紹介された。

日本数学会の論文誌 Journal of Math. Soc. Japan (JMSJ) は、SPARC Japan の支援のもとに電子化の端緒をつかみ、完全な電子化に成功しており、このほかに各種の刊行物を発行しているが、その多くの電子化を進め

てきた。

数学者の研究成果発表手段は、プレプリントを作成し、arXiv.org などに投稿したり、他の分野よりも多様な手段があるが、数学会ではこれらについて柔軟に対応してきた。大会の講演アブストラクト集、特別講演のビデオ収録などは最近の取組みで、特にビデオについてはアジア各国との協力を進めている。さらに各大学から発行されている国際誌をポータルとして形成した Digital Mathematics Library, DML-JP も発展中である。

SPARC Japan へは出版社との交渉に関するコンサルティング、モノグラフの電子化や DML-JP 拡張への支援などを期待したい。

【パネルディスカッション】

モデレータ: 安達 淳(国立情報学研究所)

パネリスト: Heather Joseph (SPARC) / 戸瀬 信之(日本数学会) / 関川 雅彦(東京大学附属図書館) / 林 和弘(科学技術政策研究所)

安達モデレータの、ゲームのルールを変えるという、今回の OA サミットを通じた基調を確認する発言から始まつ

た。

特に印象に残った発言として、林氏からの発言を示したい。Article Processing Charge に依存したミドルクラスの OA ジャーナルが普及する過程で、素性の怪しいジャーナルが出現しつつある。投稿先を定める目利きに図書館が関わるのではないか。

また、APC を機関が拠出することは米国では一般的だと Heather 氏からの発言があった。米国では多様なライブラリアンがあり、研究者との協力が比較的うまくいっているようだ。

関川氏からは、OA を推進する上での図書館の立場について、多くの学術誌が OA 化された後の機関リポジトリの役割について考えるべきであるという意見、また、APC は結局のところ購読料と同じことではないか、という意見が示された。戸瀬氏からは学会の立場から、学術誌を国際的に販売、展開する出版社が日本に存在しないことが問題であり、個別の学会が展開することの問題を指摘する意見が述べられた。人文社会系の出版形態について、altmetrics を活用したアクティブな手法をもっと取り入れてよいのではないか、という意見が出されている。

-----参加者から-----

Joseph 氏の講演は大変わかりやすく、複雑な課題をクリアに説明してくださったと感じました。「Open Access=Access + Reuse」というフレーズは、OA 活動の目指す方向をシンプルにかつ力強く表現していると思います。また、尾城次長の説明により日本の SPARC 活動の経緯と特徴が理解でき、戸瀬先生のお話で第3期までに着実に成果を上げてきたことをうかがい知ることができました。パネルディス

カッションでは、関川氏・林氏の APC に関する問題提起について、大学図書館に何ができるか考えさせられました。オープンな学術情報流通への道は、誰か一人の力でゴールに辿り着けるものではなく、研究者・図書館・学会などの関係者・機関が手を取り合って進むものであるということを今回のセミナーで強く再認識いたしました。

国立情報学研究所 鈴木 美奈子

-----企画後記-----

😊 Open Access を巡る情況が大きく変化している現状と、そこへどのように関わっていくのか、あるいは関わらないのか、強く考えさせられたセミナーでした。開催まで二ヶ月のところで届いたパネリストと講演者の推薦依頼に驚きながらもチラシの作成からニュースレターまで、何とか無事に乗り切ることができました。講演者の皆様、パネリストの皆様、参加者の皆様と事務局の奮闘に感謝致します。

北海道大学 大学院理学研究院 行木孝夫

😊 まさに右も左も分からぬ状態で、関係者の皆様には本当にお世話になりました。図書館がやるべきこと、図書館の可能性はまだまだあるのではと考えさせられました。また図書館と研究者との協力関係を今後より一層深めていくことが不可欠だと感じます。

明治大学 生田図書館事務室 西脇 亜由子

😊 初めての試みで試行錯誤！それでも我慢強くフォローしてくれた今回のメンバーに感謝です!! 事務局



講演 (Heather Joseph: SPARC North America)



パネルディスカッション



■ 第2回 SPARC Japan セミナー 2013

「人社系オープンアクセスの現在」

2013年8月23日(金) 国立情報学研究所 12F 会議室 参加者:95名

2013年第2回SPARC Japanセミナーは、人文・社会科学分野のオープンアクセス(OA)に焦点を当てた最初のセミナーとして開催されました。研究者の視点・海外および日本の動向をそれぞれ当事者から報告いただき、その後登壇者全員で「人社系OAの“これから”」をめぐりパネルディスカッションが持たれました。初めての試みのため話題は多岐にわたり、議論は次第に熱を帯びました。今回のセミナーを嚆矢に、人社系OAの諸課題をより深く掘り下げていくことが今後期待されます。参加者は大学図書館員、出版者、研究者等、計95名でした。当日の配布資料等含め詳細はSPARC Japanのweb(<http://www.nii.ac.jp/sparc/event/2013/20130823.html>)をご覧ください。セミナー概要は以下のとおりです。

【経済学と経済学者にとってのオープンアクセス】

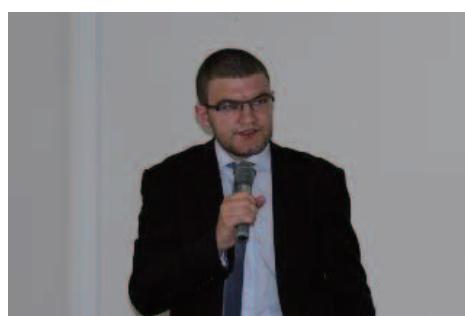
青木 玲子(一橋大学経済研究所)

経済学の特定分野においてはOA誌の登場以前にも、ワーキングペーパーにより学術情報の交換が行われていた。オープンアクセスの在り方として、情報は排他性がなく、消耗しない性質であることから、無料で提供することが効率がよい。よって、経済学の視点から見るとOA誌は理に適っているといえる。また、経済学にはtwo-sided marketという用語があり、売り手と買い手など立場の異なる二者間の利益をマッチングさせるこのモデルでは、費用負担は双方いずれでも成立する。同じく学術誌をtwo-sided marketと捉えた場合、費用負担は情報発信者・受信者のいずれでも、あるいは両方でも構わないことになる。

化し、一次資料をウェブ上で公開したり、目録を以前より早い段階でワーキングペーパーとして公開したりする向きは加速している。

【海外の動向:人社系OA誌の最前線】

Martin Paul Eve (Open Library of Humanities, OLH)



【歴史学の研究手法・環境とオープンアクセス －日本近現代史研究の現場から－】

石居 人也(一橋大学大学院)

歴史学研究の伝統として、原典や手稿など一次史料への偏重があった。また、歴史学の研究者の生態として、史料として形あるものへの執着心があり、出版文化への親近感を生む原因のひとつとなっている。速報性よりも確実性が重視されることも歴史学の特徴である。以上のようにOAに対する歴史学のニーズは全般的に高いとはいえないが、変化の兆しある。例えば1990年代後半、実証型から解釈型の歴史学へと移行する動きが見られた。後者では検証可能性の担保がより重要視されるため、典拠情報へのアクセスに关心が向き始めた。また技術的な研究環境も変

1. OAの背景と問題点

1986年以降現在に至るまでの英国の消費者物価上昇率は全体で80%だが、ジャーナルのそれは380%にも達しており、よってジャーナルの購読はもはや持続不可能である。大手出版社は莫大な利益を得ている一方、学術論文にアクセスできない研究者がいる。加えて、高評価のために高額になってしまったジャーナルの問題がある。

2. 社会的な課題

論文が投稿され、査読され、評価が高まるという流れはOA誌になってしまふことはない。OLHにおいても従来の方法を踏襲することとして、国際的に著名な研究者・専門家を運営委員会のメンバーとして招いている。保守的・

伝統的な方法により質を担保しつつ、成果を目に見える形にできた時点で、段階的に革新性を持たせていきたい。人社系の論文刊行に主眼を置きつつも、モノグラフ(専門書)も無視できないため 5 年間の時限的なプロジェクトとして出版者 4 者と協力して OA 出版を実現する予定である。

3. 技術的な課題

特定分野の専門家が中心となり、評価の高いジャーナルからすぐれた論文を選び出して「オーバーレイジャーナル」とし、これをメガジャーナルの上に構築することを検討している。また、人社系の研究者は、デジタル保存の耐久性を不安視する傾向があることから、LOCKSS、CLOCKSS など安定性と耐久性を兼ね備えた技術を活用することを考えている。

4. 財政的な課題

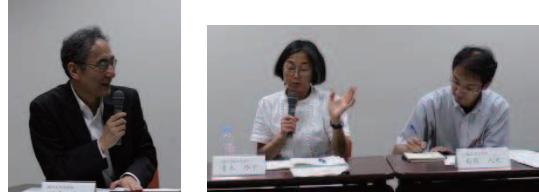
このプロジェクトのコストは、モノグラフの出版費用も含めて、5 年間で約 260 万ドルと見積もっている。まず寄付を募り、次に自立的な運用を目指す。

【「学術情報」と「体系的な知」のはざまで —大学出版の模索】

鈴木 哲也(京都大学学術出版会)

京都大学学術出版会では 5 年前から出版物を実験的に京都大学学術情報リポジトリ(KURENAI)に無償掲載するというプロジェクトを行っている。グリーン・ゴールドという OA 全体を考えたときに、必ずしも人文系が自然科学系に遅れているわけではない。とはいっても、学術書としての紙の本は、体系的・総合的な知を身につけさせるものとして重要であるにも拘わらず、従来の学術出版はそのニーズに応えていなかったという問題がある。本にするものとしないものの仕分け、本・雑誌・OA の棲み分けが必要である。OA のビジネスモデルの確立もまた困難な課題として残されている。

【パネルディスカッション 「人社系 OA の“これから”】



モデレータ: 蛭名 邦禎(神戸大学大学院)
パネリスト: 青木 玲子(一橋大学経済研究所)／石居 人也(一橋大学大学院)／Martin Paul Eve (Open Library of Humanities)／鈴木 哲也(京都大学学術出

版会)／松本 和子(慶應義塾大学理工学メディアセンター)

冒頭、松本氏より、大学図書館の視点として、人社系の図書館の状況、人社系研究者の資料へのアプローチや、この分野における電子化の現状、国の取り組みとして科研費の成果の OA 化を促進することなど、多岐にわたる話題が提供された。

続いて、モデレータの蛭名氏より、①OA の現状: 本当に人社系の OA は自然科学系と比べて遅れているのか、研究分野により研究手法が異なることによる問題ではないのか、②OA の目的: 学術研究の推進と学術成果の還元をどのように考えるか、③研究者の育成、④学術コミュニケーション: 研究者と一般市民という異なる情報の受け手をどのように考えるのかなど、講演・話題提供の内容をふまえてのまとめがなされ、フロアも交えて、ディスカッションが進められた。

まず、青木氏からは、OA では、学術情報の流通それ自体が重要なのか、あるいは学術成果の評価のため、より合理的な出版形態が求められているのかなど、何を OA に期待するかによって論点は変わってくるのではないかという意見があった。

続いて、石居氏からは、歴史学は速報性よりも確実性を重視する学問だが、科研費のように期間を区切った中の成果公開も必要であり、助成を受けている研究成果と OA 化との親和性は高いとの意見があった。

一方、Eve 氏からは、成果は広く社会に還元されるべきものであるにもかかわらず、学術情報が取引される市場は出版者の独占状態にあるとの発言があった。

鈴木氏からは、紙の本の優位性はディスカバビリティにあり、ピンポイントで利用される電子より偶然の発見を引き出しやすいといいの発言、また OA にナビゲーションできる機能を付加する方法があるとの発言があった。

松本氏は、図書館では人が少なくなってきた中で人材育成は大きな課題であるとして、研究者のみならず図書館員の育成の問題にも言及した。

フロアからも活発に意見や質問が出された。一例を挙げると、紙媒体で利用された資料を OA または電子で安く再利用できる方法はないかという質問があり、これに対しては、電子と紙とは異なる機能を持つことから相互補完的な関係にあり、むしろ PDF の存在が紙の本の価値を押し上げるなどの回答があった。

パネルディスカッションの後半では、学術コミュニティと一般の人々のリテラシーの問題が取り上げられた。換言すれば OA の受け手をどのように考えるかという問題である。

鈴木氏は、本は何のためにあるのかということを明確にすると同時にリテラシーは必要であり、出版者がコンセプトを

明確にすべきであると主張した。

Eve 氏は、まず資料を提供しなければリテラシー能力も向上しないとした。

石居氏からは、OA を前提とする場合・しない場合では情報の受け手が異なるため、これを意識して執筆していること、また、学術的コミュニティに限定して公開するもの、広くオープンとするもの、それぞれの場合において関係者の同意を得ることが必要であるとして、情報受信者との関係性にも言及した。

OA の目的という根本的なトピックに始まり、リテラシーの問題に至るまで、人社系 OA に関わる諸問題を浮き彫りにしつつ、パネルディスカッションは白熱のうちに終了した。



-----参加者から-----

今回の内容について

(大学/学術誌編集・図書館関係)

・複数の立場から OA について述べられていて、とても勉強になりました。

(大学/図書館関係)

・図書館が OA に係わってゆくポイントが明確に語られていました。

・青木先生の two-sided market の話が面白かったです。

OA に期待するものの、目的がはっきりしないとコスト負担者が決まらないとのこと。また、本の意義、紙への偏重といった人文の特徴や OA でのかき分けの話も印象に残りました。

(大学/大学・教育関係)

・人社系に特化しており、興味深く参加できた。

・様々な人文社会系の学術流通を担う方々の講演が聞けて大変勉強になりました。

・人社系 OA の現状を海外の動向を含め整理することができました。

(大学/研究者)

・この種の話を多面的に聞く機会は重要でしょう。さらに comprehensive な状況説明が必要だったのかもしれません。電子化と OA の話が入り混じっていた印象があり、その点で Martin 氏の話は興味深かったです。

(企業/学術誌編集関係)

・OA 化をめぐる費用の問題を経済学的観点からお話を伺えると期待していたが、異なっていました。

(その他/図書館関係)

・発表者の OA の対象が違ったため、問題点の絞り込みがむずかしかった。

その他、企画に関する意見、感想

(大学/図書館関係)

・もっと人社系を中心にしたテーマを取り上げて欲しい。
・人社系 OA 誌のコスト負担者、ビジネスモデルが気になります。

・OA について 1 年をとおして学ぶことができる有意義な企画だと思います。



-----企画後記-----

😊 オープンアクセスに関する議論は増大・多様化し、現状把握もままならないのが正直なところです。おそらく国内初となる人社系 OA セミナーでは、話題整理にもっと時間を割いたほうがよかったのかかもしれません。しかし研究者・出版者・図書館員・OA 出版発起者といった「各当事者」から現場の率直な声を聞くことができ、次の企画につながる視点がいくつか提示されたことはスリリングな体験でした。

一橋大学附属図書館 福田名津子

えますが、実は… 裏面はある夏野菜をモチーフに。

早稲田大学図書館 今村昭一

😊 正直、オープンアクセスって何?の状態で引き受けてしまったことを後悔していました。案の定、準備から本紙のまとめまで、福田先生、今村さんに頼りつきになつてしまい申し訳ございませんでした。

印象に残っているのは、プロジェクトの進め方でした。正直、顔合わせもなくメールだけで作業を進める方法には最後まで戸惑いつぱなしでした。

慶應義塾大学メディアセンター本部 島田貴史

😊 セミナーの企画もさることながら、今回楽しかったのはチラシの作成。人社系 OA がこれから伸びていくイメージで緑を基調としました。表のデザインは葉脈にも見



■ 第3回 SPARC Japan セミナー 2013 「オープンアクセス時代の研究成果のインパクトを再定義する： 再利用と Altmetrics の現在」 2013年10月25日(金) 国立情報学研究所 12F 会議室 参加者:107名

2013年第3回 SPARC Japan セミナーは、今年の Open Access Week のテーマ“Redefining Impact”とも呼応しながら、研究成果のインパクトについて焦点を当てました。欧米では研究データの OA 義務化が進むなど論文データの再利用についての議論が盛んになっています。また、オープンになった多様な研究成果について、ソーシャル上での反応など、従来の評価指標とは異なる手法によってその影響度を測る“Altmetrics”も注目されています。このように研究成果とそのインパクトの両者について従来の定義を拡大する必要が出てきています。セミナーでは、それぞれの第一線の論者からの報告を頂いた後、これから OA についてパネルディスカッションを行いました。フロアからも活発な意見が出され、盛会のうちに終了しました。今回のセミナーをきっかけに、国内でも議論が進むことが期待されます。参加者は出版者、大学図書館員、研究者等、計 107 名でした。当日の配布資料等含め詳細は SPARC Japan の web (<http://www.nii.ac.jp/sparc/event/2013/20131025.html>)をご覧ください。セミナー概要は以下のとおりです。

ビデオレター

オープンアクセス出版のフロントランナーで、SPARC Japan セミナーにも講師として招聘したことのある、Mark Patterson (eLife), Peter Binfield (PeerJ)の両氏から、活動の近況やメッセージをビデオレターで頂き、セミナー冒頭に上映しました。Binfield 氏の締めの言葉は、“Go! Open Access!”という力強いものでした②

務化等が挙げられる。この実現にあたっては、大学図書館による研究データ管理支援に期待が集まっている。英国では、各大学図書館がその規模や事情に応じてポリシー策定と計画立案を行い、デジタルキュレーションセンター (DCC) のサポートを受けながら、サービスを提供している。将来日本でも研究データ管理支援に乗り出す場合、自機関の研究者のニーズを的確に把握し、支援すべき部分を明確に理解し、提供することが重要である。海外のトレーニングプログラムの活用や、標準化されたメタデータの使用、適切な外部リソースの活用等を提言したい。

講演

英国における研究データ管理支援の動向 池内 有為（筑波大学大学院）

研究データの公開と再利用が様々な分野に広がっているが、この推進要因としては、研究の効率化、研究結果の検証、国や研究助成機関等による研究データ公開の義



The "Reuse Factor" and the Future of Credit for Research

Mark Hahnel (figshare)

なぜ多様な研究成果をすべてオープンにすることが必要なのか、またそれは将来の研究活動にどのような影響を与えるのか。論文を執筆すると膨大なデータが作られるが、論文で発表されるのはそのほんの一部にすぎない。研究データを含め自分の研究成果をすべてオープンにし、アクセス可能にすることは、自分の研究成果がいかに影響力があるかを示すことになる。

しかし、研究成果のオープン化が進み情報量が膨大になると、その成果のインパクトを測定してフィルタリングする



ことが必要になってくる。figshare では各コンテンツ(ビデオ、データセット、図表など)に DOI を付与し、引用可能にしており、figshare に登録することで発見されやすくなり、より影響力を持つようになる。

他人の研究成果を利用したいと思っている人と、自分の研究成果を共有してもよいと思っている人の割合には差があるという報告がなされているが、その解消のためには、研究者に研究成果物の登録を促すためのインセンティブや、米国科学財団(NSF)のポリシーのような強制力が必要である。助成を受けた研究に対して研究データのオープンアクセス化を義務付ける動きは、米国だけでなく欧州でも広がっている。しかし助成機関は、ポリシーで研究データ公開を義務付けていても、それに対応したサポートを行っているとは限らない。この場合、図書館がサポートを行う必要があるだろう。

機関内でどれほどの研究データが生み出されているのか把握されていないことも多い等、様々な課題があるが、私たちが主眼に置くべきことは、研究者も機関も、その研究成果のインパクトをより大きくしたいという共通の願望を持っており、そのインパクトをどのように測定するかということである。被引用数は今でも非常に重要な測定方法だが、それだけでは十分でない。私は、論文にとどまらずデータやコード等あらゆる成果物のインパクトを測定する“Reuse Factor”という考え方を提唱している。研究の成果を測定する様々な方法が出てきているが、なかでも、Altmetrics は Web ネイティブなツールとして非常に優れており、論文だけでなくデータセットやビデオなど、多様な研究成果に活用することができる。figshare は主要な Altmetrics サービスに対応しており、出版社とも提携している。

データの場合、引用記法が定まっておらず、参考文献に載っていないものはインパクトの測定対象から漏れてしまうという問題も生じている。このような問題に対応するため世界的に機関が取り組みを行っているが、研究者への啓蒙活動がうまく機能していない。この点は図書館が責任を持つべきである。

Web の時代では研究内容・研究成果とともにオープン化が進んでいる。このオープンリサーチ、Altmetrics によって、次世代の研究はより効率的に行うことができるだろう。

Altmetrics: The Next Step for Open Access

Jason Priem (ImpactStory)

オープンアクセスが重要であることは言うまでもないが、これは研究の将来に向けた、必須の第一ステップでしかない。学術コミュニケーションにおいては、Web をまだ最大限に活用できていない。現在の変革は流通にとどまっているが、データの収集、分析、そのストーリー展開、対話といふ4つのことも Web への移行が可能である。

データは、figshare や Dryad などのリポジトリを活用して Web 上で公開することができる。公開されると、そのデータの共有、分析、複製が可能になる。続いて、従来の論文や図書だけでなく、Web 時代においてはビデオやブログ、インフォグラフィックなど様々な形で、研究がどのように行われたか、その過程を語ること(ストーリーテリング)が可能である。そして、Web は対話を促進するのに適したツールで、集合的な知を活用できる。

Web 上では、従来からの伝統的手法を用いた出版公開だけでなく、自ら簡単に論文やデータを公開することができるようになった。ピアレビューも、Web 上で公開されたものへのコメントで代替可能である。ただし、フィルタリングの必要性もあり、ジャーナルが不要になったわけではない。

フィルタリングのためにはなんらかの定量的評価指標が必要である。従来の被引用数もインパクトを可視化することができるが、一部しか反映できていないという問題がある。研究成果物への参照は Web への移行が進んでおり、すべてのインパクトをすべての側面から把握することも可能になってきている。それらのインパクトは、audience(誰が見ているのか)、engagement type(どういった形で関わっているのか)の2つの側面から分類することができる。このような指標を、代替的指標(alternative metrics)から Altmetrics と命名した。

現在進んでいるのは、Google のようなネットワークベースのフィルタリングを学術コミュニケーションに適用しようという試みである。ただしこれはオープンな形で行われる必要がある。

ImpactStory
は、すべての
科学者の、す
べてのプロダ
クトの、すべて
のインパクトを
カバーするオ
ープンなデー
タソースを作る



ことを目指している。

Webの登場により、学術コミュニケーションの第2の革命が来ようとしている。どういった方向に行くのかはまだ見えていないが、来ることは間違いない。

生命科学分野の大規模データ利用技術開発の現状と今後の展開

坊農 秀雅（ライフサイエンス統合データベースセンター）

ライフサイエンス統合データベースセンター(DBCLS)では、関係機関と連携しながら、ライフサイエンス分野のデータベースを統合し、使いやすくする取り組みを行っている。データベース(主に日本で作られたもの)のカタログや、データベース横断検索サービスの提供のほか、管理不能となったデータベースの引き取りも行ってきた。

DBCLSの取り組みとして、①データベース統合化技術開発、②信頼できるコンテンツ作成について紹介する。①については、RDF^{*}によるデータベース統合をメインに行っている。ライフサイエンス分野では、次世代シーケンサーにより大量の塩基配列データが生産されているが、ヒトの場合には倫理的な問題で必ずしも公開できるわけではない。また、メタデータの粒度(granularity)は必ずしも統一されているわけではない。データが大量にあるので、DBCLS SRAという言わばイエローページを作成し、各データのクオリティチェックも行っている。また、各データと、そのデータを用いている論文とを紐付けるサービスや、NLMのMeSH^{**}で分類した疾病ごとに関連データを提供するサービスも行っている。②についても意欲的に取り組んでいる。新着論文レビューは、トップジャーナルに掲載された日本人論文について、その著者に、自分の論文について、母国語である日本語でレビューしてもらうというもの。図はCC BYで再利用可能。また、「領域融合レビュー」は、各分野の研究者によるやや長めのレビューで、こちらはDOIも付与される。このほか、ライフサイエンス分野のデータベースのチュートリアル動画「統合TV」等も提供している。

ライフサイエンス分野ではDBCLS等がデータベースの統合化に取り組んでいるが、まだ研究者にその存在を紹介し、使ってもらう段階。

一方で日々大量のデータが生産されている。今後データの共有を促進するためには、データの適切な引用の確立や、不適切な利用の抑止が必要だろう。また、トラッキング機能や成功事例の充実な



どで、データを流通させるメリットについて認識を広めていくことが必要だろう。

岡山大学学術成果リポジトリにおけるAltmetricsの導入について

大園 隼彦（岡山大学附属図書館/DRF）



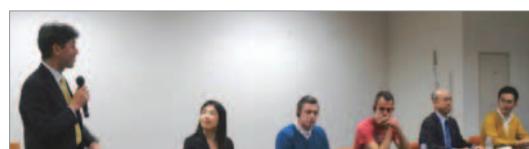
このほど、岡山大学ではリポジトリにAltmetricsを導入した。導入の意図としては、現在リポジトリのコンテンツは紀要論文が主だが、オープンアクセス推進のため、リポジトリに新しい評価指標を追加することでリポジトリのメリットを示し、紀要論文以外のコンテンツの登録に繋げたいという狙いがある。

Altmetric.comを採用した主な理由は、無償であり、導入がしやすく、Altmetric Explorerという管理ツールを図書館員は無償で利用できること。リポジトリでは以前からWeb of ScienceやSCOPUSの被引用数表示は行っていたのだが、これにAltmetricsが加わった。リポジトリの検索結果一覧表示画面と詳細結果表示画面に、Altmetric.comのバッジを表示させている。管理者のみが閲覧できる画面では、API取得によりさらに詳細な情報も表示するようにしている。

導入後、学内刊行誌を例に、リポジトリでのダウンロード数、Altmetric.comのスコア、Mendeley Readership、Web of Science被引用数の比較を行った。限られた標本数ではあるが、Altmetric.comスコアとリポジトリ利用に相関関係はなかった。しかし、多様な指標を表示する意義はあると考えている。

リポジトリのコンテンツ拡大には、Altmetrics以外にも、研究者が紀要以外のコンテンツを登録するインセンティブを用意する必要がある。識別子の活用も一つの方法だろう。

パネルディスカッション



モデレータ：林 和弘（科学技術・学術政策研究所）

パネリスト：池内 有為（筑波大学大学院）／Mark

* RDF: Resource Description Framework

** Medical Subject Headings

Hahnel (figshare) ／Jason Priem (ImpactStory) ／
坊農 秀雅(ライフサイエンス統合データベースセンター) ／大園 隼彦(岡山大学附属図書館/DRF)

冒頭、モデレータの林氏から各講演の概括がなされた後、フロアからの質疑を受けながら、ディスカッションが展開された。

データ共有にあたって必要となるメタデータの付与を誰が行うべきか、フォーマットをどうすべきか、という質問に対しては、坊農氏から、比較的共有が進んでいると思われている生命科学分野でも、経験の蓄積があつて形成されてきていること、すべてのデータが標準化されているわけではないことが紹介された上で、データを利用したい人同士で決めていくのがよいのではないかとの回答があったほか、池内氏から、研究者がメタデータを付与するのが理想だが、そのためにはデータが論文と一定程度に評価されるようになることが必要だとの指摘があった。データ公開の評価に関しては、フロアからデータジャーナルの紹介もあった。

ソーシャルメディアにおけるインパクトをどのように正確に捕捉するか、ということについては、Priem 氏から、記述の不備等により捕捉できないインパクトも存在するが、そのバイアスはすべての成果物に対して同等にかかるており、インパクトの割合には影響ないと考えている、長期的には、高度化したデータマイニングが可能になるだろうとの発言があった。

データと著作権の問題については、Hahnel 氏から、公的資金を用いた研究成果物については、権利主張は困難だとの考えが示されたほか、坊農氏から、DBCLS では公的資金が費やされていることから CC BY を基本ライセンスとしていることの紹介があった。

フロアから寄せられた ImpactStory 機関版への期待に対しては、来年中には対応したいとの回答が、海外での

Altmetrics 普及状況についての質問に対しては、現在 Altmetrics の有用性についてのエビデンスを蓄積しているところとの説明が、それぞれ Priem 氏からあった。これに関連して林氏から、論文が出版される前に公表された研究データのインパクトの大きさは、論文の被引用数の先行指標になる可能性がある、と Altmetrics の持つポテンシャルについての補足説明があった。

今後の図書館の役割について、Hahnel 氏、池内氏から、研究者の支援や啓蒙に大きな役割を担っているとの指摘があったほか、フロアから、世の中や組織のニーズに応じて図書館員の仕事内容も変化していくだろうとの発言があった。

また、フロアから、データ改ざんのような研究者の不正を抑止するには、という問題提起がなされた。Hahnel 氏から、データが公開されていればその再分析ができるとの発言があったほか、Priem 氏から、多くの人の目によるチェックや、自然数のパターン解析により不正を発見することができるだろうとの発言があった。

今後も様々なソーシャルメディアが出現するだろうとの指摘に対しては、Priem 氏から、消えていくデータソースもあるが、なるべく多くのデータソースを常にモニターしてデータを収集し、その解釈は受容者に任せる形を取っていることの説明があった。

終始フロアとの活発な意見交換が行われたが、最後に林氏から、これまでの OA に関するセミナーでは、どうやってオープンアクセスにするかが議論の中心を占めていたが、今回は、オープンアクセス後の世界がどうなるか、各関係者がどうすべきかの議論に集中でき、新たな展開を迎えることができたことへの感慨が述べられ、最先端の内容と議論を参加者各自の今後に活かしてほしいとの期待が示されつつ、パネルディスカッションは終了した。

-----参加者から-----

■ 今回の内容について

(大学/図書館関係)

- “ インパクトファクターとは違った評価基準について、最近の動向が理解できた。また、データの公開についての現状も分かりやすく説明され、非常に役に立った。 ”
- “ リポジトリにもデータ格納という話と、Altmetrics の話は、どちらも今回初めて知識を得ることができ、大変良かったです。 ”
- “ 初めて知ることが多く、大変勉強になりました。今や

OA が前提であること、雑誌が前提ではないことが印象的でした。 ”

“ 日本における OA、Altmetrics の現状と問題点を聞きたかったが、Altmetrics を学ぶ段階にあつた。 ”

“ 英米の助成団体は、データの再利用の価値を認識しているようであるが、Web によって研究が変化していることさえ認識のない研究者に、図書館員はこのことをどう伝えてゆけば良いのか考えさせられた。考えてみたい。 ”

“ データリポジトリについては、まだ日本の意識では



海外に追いついていないのではないかと感じる。
(おそらく分野では存在するIRを使う点に関して) ”

(その他/研究者)

“ インパクトファクターの異常な使われ方に疑問があり、
その他の評価方法について興味があった。概ね満足している。改変されていないオリジナルを保有し、
それを明示することも一つかと思う。 ”

“ 現在の日本国内の現状が良くわかった。 ”

“ ライフサイエンスの分野でもデータの囲い込みが問題であると思っていたが、他の分野ではもっとひどい
ことがわかつて意外だった。 ”

■ 今後聞いてみたい内容・テーマ・講演者

(その他/その他)

“ Altmetrics 導入にフォーカスしたワークショップ開催を期待しています。 ”

-----企画後記-----

😊 語られる OA の未来の姿にわくわくしつつ、それを実現するために図書館はどんなことができるか、宿題ももらったように思いました。企画側としては、講演を快諾してくださった講師の方々(実現できて本当にうれしい布陣でした)、企画を引っ張ってくださった林さん、松本さんほか WG メンバーの方々にも感謝です。Altmetrics については先日日本版サービスもリリースされ、今後の展開が楽しみです。

西薗 由依 (鹿児島大学附属図書館)

😊 私は OA+Altmetrics→OAW で頂いたテーマのブレークダウンと、海外講師のコーディネートを行いました。後は西薗さん、松本さんに安心してお任せすることができました。シンガポールのイベントで Jason を口説くとき、すでに内定が決まっていた figshare との組み合わせで OAW にどのように貢献できるか少々不安でした。しかし実際は全くの杞憂で全員の話題提供が相乗効果をもたら

■ その他、当企画に関する意見、感想

(大学/学術誌編集・図書館関係)

“ 日本語論文についても Altmetrics が取れる流れを作るための動きと、研究者への啓蒙が必要であろう。 ”

(その他/図書館関係)

“ 内容はとても意義のあることだと思うが、自分の業務とつなげることはできない。大きな議論ではなく、とりあえず Altmetrics をやってみようという企画にして欲しい。 ”

(その他/その他)

“ サイバーフィジカルの領域では、信頼度の高いデータの入手が課題とされていますが、データリポジトリの動きが大きく関係してくるのではないかと感じました。 ”



らし、オープンアクセスの基盤的ポテンシャルを再確認した上で、未来に繋がる議論ができたことを素直に嬉しく思っています。

林 和弘 (科学技術・学術政策研究所)

😊 個人的にはツール系が大好きで、今回は非常に楽しみにしておりました。figshare にしても ImpactStory にしてもスピード感があって、すごく積極的でフレッシュな印象を持ちました。Mendeley もそうですが広く受け入れられるツールには、目新しいだけではない、きちんとした分析による裏付けとちゃんと遊び心が備わっていますね。来年、この両者はどうなっているのか、さらに新興勢力が出現してくるのか、目が離せません！

松本 理抄 (国立情報学研究所)





■ 第4回 SPARC Japan セミナー 2013

「今日の問題を解く、学術情報の受信と発信

—Think Globally, Act Locally—

2013年12月19日(木) 京都大学百周年時計台記念館国際交流ホールIII 参申込者:63名

2013年もオープンアクセスという情報流通について、様々な観点からセミナーが企画され、いずれの企画も盛況であったと聞きます。この締めくりをかねて本セミナーでは、実践的な視点からインターネット上に散逸する図書資料(Eリソース)を管理する方法から、オープンアクセス資料も含む機関利用状況を把握する際の課題、購読可否の目利きに役立てる情報の読み方までを、図書館(受信)にまつわるセッションAとして組みました。また学協会・出版者が、オープンアクセスという選択肢を発信強化に活かすとしたら、どのような課題があるか、APCの仕組み、大学・研究機関あるいは研究コミュニティではどのように捉えているかという視点に立ちセッションBを組みました。欧米に学ぶオープンアクセスは、日本における受発信の道を切り開くチャンスとなるのかー聴講者も参加し共に考える場として、2つのセッションを各5名のファシリテーターのリードで進める挑戦的なセミナーであったと思います。なお本セミナーの副題は、6月にサンフランシスコで開催された学術出版学会(Society of Scholarly Publishing)でのセッションテーマから取ったもので、世界地図の中心がどの国であっても、世界を知り自国で展開する試みが世界共通のテーマであることを表しています。

【京都大学におけるEリソース管理の現状と課題】

塩野 真弓(京都大学附属図書館)

京都大学では ERMS(電子情報資源管理システム)を中心としたEリソース管理を始めて6年が経過した。Eリソースのスムーズなナビゲート、安定的な提供を目的として、リソースの費用対効果が最大となることを目指している。管理面については、契約/ライセンス情報や価格情報、アクセス管理などの情報を集約、蓄積し、共有が可能になっている。また、Knowledge Baseを中心としたEリソース管理により、世界中で収集された最新のメタデータが利用できる。パッケージを契約単位でプロセスできるのも利点である。しかし、一方で、問題点もいくつか存在する。

一つめは、メタデータに関する問題である。特にオープンアクセスジャーナルや国内タイトルのメタデータが不足していることが挙げられる。出版社によって、ライセンス情報の表現に統一がとられておらず、入力に手間がかかる。また、論文レンタルや個人登録すると読むことができるタイトルへの対応ができない。更に、メタデータの粒度は基本的には Title 単位であり、Article 単位のメタデータはない。例えば、部分的にオープンアクセスとなっている、Hybrid OA Journalなどにナビゲートできない。網羅的なジャーナルの提供体制を確立することが今後の課題である。

国内タイトルにおいては、ERDBプロトタイプ構築プロジェクトで一部改善される可能性がある。ERDBとは、いわ

ば、NACSIS-CAT の E リソース版で、ライセンス情報、JUSTICE 交渉タイトルや国内のフリーのメタデータなどが集約されるというものである。

問題点の二つ目としては、リソースの評価に関する点である。京都大学では統計ツールは未導入である。そこで、各出版社の COUNTER¹準拠レポートや、契約タイトルリスト、プライスリストを基に Cost Per Use(ジャーナルごとの論文 1 ダウンロード当たりのコスト)を算出しているが、キーとなるべき ISSN には間違いも多く、作業に困難をきたしている。できるだけ多くの流通過程に統一の ID が欲しい。

それに加えて、オープンアクセスジャーナルの評価については、APC の額を把握していないため、購読タイトルとの比較ができない。また、Hybrid OA Journal の場合、Article 単位の利用統計が必要となる。

評価基準については、Cost Per Use を算出できたとしても、一概にそれだけをもとにリソースを評価することはで

¹ COUNTER(Counting Online Usage of Networked Electronic Resources): オンライン情報サービスの利用統計を標準化するために、図書館員と出版社により 2002 年に設立された非営利団体。信頼性があり、比較可能で、一貫性、互換性のある利用統計(usage statistics)が必要であるとの観点から、COUNTER 実施規則(利用統計のフォーマット)が全世界の図書館員、出版社、仲介業者やその職能団体によって遵守されている。(『電子資料契約実務必携』大学図書館コンソーシアム連合 http://www.nii.ac.jp/content/justice/documents/justice-companion_excerpted_201203.pdf より引用)

きない。評価基準として何を採用するのかということも課題の一つである。

【NIMS 材料科学図書館の電子リソース管理】

田辺 浩介(物質・材料研究機構)

物質・材料研究機構(以下 NIMS)図書館では、E ブックを含めて 25,000 冊の蔵書とオンラインジャーナルは約 660 タイトルの材料科学分野を中心とした資料を提供している。予算と価格高騰の兼ね合いもあり、新規購入図書は E ブックを原則とし、オンライン版がないジャーナルは購読中止とするなど、E リソースへの集中投資がなされることになった。その中で、E リソースの利用情報の把握は E リソースの評価を行う上で喫緊の課題である。

NIMS では E リソースの利用コストの計算を少ない手順で安価で行いたい、また従来は手作業で HTML の更新により E リソースの一覧を管理していたが簡便に行いたいなどの要望があり、E リソース管理システム Next-L Enju ERMS(以下 enju_erm)を独自開発し、E リソース管理を行っている。enju_erm では、電子リソースの書誌情報管理、契約情報管理だけでなく、SUSHI²による COUNTER 統計の取得、書誌情報・契約情報との照合によるジャーナルごとのコスト計算などを行うことができる。具体的には、ジャーナル情報、契約情報や利用統計(SUSHI による取得)を enju_erm にインポートし、それらが、図書館ポータルや、Cost Per Use の算出表、利用可能な E リソース一覧リストなどそれぞれに反映される仕組みになっている。

システム運用後の課題としては、契約情報の enju_erm への入力がやや複雑であり、それらを簡素化することが挙げられる。また、サイト維持費やバックファイルの価格など、パッケージ内でジャーナル価格の案分方法を設定できるようにすることなどがある。

E リソースの評価においては、様々な手段が挙げられる。もとになる統計としては、出版社ごとのダウンロード数、ジャーナルの分野ごとのダウンロード数、などがあるが、SCImago Journal & Country Rank³や CWTS Journal Indicators⁴などの他のデータベースを参照し、参考にすることもできる。また、研究者の声を直接汲み入れて評価す

るということも一つの方法である。どのように重みづけを行うのかが課題となっている。

【近年の学術情報流通の意識と動向】

— 学会誌のオープンアクセス化など】

村山 泰啓(情報通信研究機構)

情報のオープン化は単に学術雑誌だけにとどまらず、オープンガバメント、科学研究データの共有など広範にわたる。G8 サミットでは原則としてのオープンデータが議論され、オープン化先進国である英国王立協会は「公開事業としての科学」という報告書を公表している。近代科学は古くから研究情報の発信とともに発展してきている。17 世紀に王立協会が発行した *Philosophical Transactions* が学術誌として情報流通に世界で初めて成功したとされる。科学的研究成果・発見を公開し、その検証可能性・再現性を担保する情報流通制度は今日の科学技術研究活動を構成する重要な要素といえる。従来主流であった紙媒体による出版に次いで、今後は電子媒体も非常に重要な手段となる。原著論文だけでなく、研究成果の再現性を担保するためのデータを「出版」できる体制・手法の議論・試行が国際的にも進められている。しかし電子媒体による長期の学術情報マネジメントはまだ課題もあり、紙媒体との関係や、公開すべきデータの評価・品質管理等の方法論確立は今後も取り組むべき課題と言える。ここで地球惑星分野の 5 学会が出版する欧文誌 *Earth, Planets and Space (EPS 誌)* のオープン化について紹介したい。EPS 誌は Springerからの出版によって 2014 年から完全な Open Access となる。立ち上げ期は研究成果公開促進費を利用して刊行するが、いずれ自立したいと考えている。最初は掲載料を低く設定し、Letter 論文、特集号や Invited paper、途上国からの投稿も優遇することとしている。計画調書では、投稿の半分以上が Letter となり、インパクトファクターも 1.5 (2014) から 1.8 (2016) 以上となることを最低限の目標とした。東日本大震災の特集号が成功を収めたのは未曾有の大災害で世界中の注目を集めたという特殊な事情もあるが、OA 化は情報オープン化という大きな流れの中で必至であり、世の中のニーズにも合った選択だろうと考えられる。

【学術誌 OA 化を実践してわかったこと】

— 研究者コミュニティからのメッセージ】

野崎 光昭(高エネルギー加速器研究機構)

理論物理研究者の中では有名誌だった *Progress of Theoretical Physics (PTP)* は 2012 年に OA 化し、実験系の論文も受け付ける *Progress of Theoretical and Experimental Physics (PTEP)* 誌として生まれ変わった。この OA 誌は KEK や理研など国内の中核 6 機関から支

² SUSHI(Standardized Usage Statistics Harvesting Initiative):2005 年に米国情報標準化機構(NISO)が開始したプロジェクトで、COUNTER 準拠の利用統計データを自動的に取得できるプロトコルを開発することを目的としている。すでに ANSI/NISO Z39.93:2007 としてプロトコルが規格化され、SUSHI プロトコルに対応している出版社は 2012 年 2 月時点で 38 社ある。(『電子資料契約実務必携』大学図書館コンソーシアム連合 http://www.nii.ac.jp/content/justice/documents/justice-companion_excerpted_201203.pdf より抜粋して引用)

³ <http://www.scimagojr.com/>

⁴ <http://www.journalindicators.com/indicators>

援を受け、KEK の加速器を用いた国際共同実験の実験論文を出版することもできた。過去 1 年の投稿状況をみると 4 割程度の掲載率で海外からも相当数の投稿がある。現在の刊行体制をみると科研費による補助のお陰で大きな自由度が生まれている。今後、科研費が無くなつた時の体制を考えると、掲載料の他に機関支援や SCOAP3 からの収入が重要になる。SCOAP3 とは素粒子物理学の研究機関がチームを組んで出版社と交渉し、特定の雑誌を OA 化させる代わりに各機関が出しあう資金から掲載料を一括払いする国際連携である。現在 15 カ国 18 機関が参加し、日本からは NII が署名している。多くの機関がまとまるほど資金を確保でき出版社への交渉力が強まる。米国は参加していないが、主要誌が OA 化して購読料が削減された分は SCOAP3 に拠出しており、大国の矜持を感じさせる。この例からも、雑誌の OA 化は適切な掲載料を設定すれば可能であり、科学先進国がそうでない国を (OA 化を通じて) 支援する体制づくりは当たり前である。日本は経済大国である以上、それなりの貢献を期待したい。素粒子分野は国際的なまとまりが強く SCOAP3 という連携が可能だった。国際的な研究協力の好例である。

【グループディスカッション】

■討論テーマ■

- A: E リソースの目利き—ネットに散在する様々な学術情報資源の分析と判断
- B: オープンアクセスの実情—新しい出版モデルの出納帳

～参加レポート 1～

グループディスカッション、テーマ A では、「E リソースの目利き」として、年々数が増加、かつ価格高騰している E リソースの取扱選択時の客観的分析材料として COUNTER のデータを利用していること等を先行機関の皆様から教えていただいた。テーマ B では「オープンアクセスの実情」と題して議論した。その中で「同じレベルの雑誌であればできれば OA 誌に投稿する。理由は、自分が OA の恩恵を受けているから。」と質問に回答された研究者の先生の言葉が大変意義深く感じた。研究者の方もせんが、OA の着実な浸透を実感した。

私は今回初めて、近隣の京都大学での開催のおかげで、SPARC Japan セミナーに参加できた。HP 等を適宜チェックしていましたが、読むだけでは得られない情報等があることが、参加することで気付いた。本学も今回得た情報を参考にして、早々に体制を整えなければならない。ぜひ、今後も NII 開催だけでなく全国各地でセミナーの開催やネット中継等をしてくれるよう希望する。

～参加レポート 2～

私のグループでは、昨今の価格の高騰・円安等のために、「どのコンテンツの購読を打ち切るか」という観点で E リソースを評価している機関の方が多かった。COUNTER による統計を用いて、各コンテンツの 1 アクセスあたりの単価を算出し比較するという評価法が主流であったが、その方法のみで E リソースを評価したところ、特定の分野のタイトルが 0 になってしまった、という事例もあった。利用度の可視化・数値化が容易になった今、例えば数学は他の自然科学分野に比べて 1 つの論文をじっくり読む傾向がある等の知識に基づき、利用度という数字をさらに一步先で、合理的に活用できる能力が図書館員には求められていると感じた。

後半の OA のテーマでは、様々な立場の参加者により OA についての議論が交わされた。RSC のパッケージ契約に付随してきた APC のパウチャーについて学内研究者に告知をしたが、意外と利用がなかった、という図書館員からの報告に対し研究者の方から、APC というものについての情報発信にも、図書館は注力する必要がある、と指摘をされた。また OA により論文のインパクトが増すということは既に証明されているし、自分自身も OA を好んでいる、という研究者の声を聞くことができたのは、大きな励みとなつた。

～参加レポート 3～

私は Group 3 に参加しましたが、テーマ B (OA の実情) については、SCOAP3 の意義に関する討論が主となりつつ、出版に至るまでの総コスト(主に人件費)を下げる方法がなく、研究者が本数確保のために内容の薄い論文を多く発表せざるを得ない背景に言及があった。次にテーマ A (E リソースの目利き) について、COUNTER の概要の確認と参加者勤務先の EJ の COUNTER 提供状況、外為相場、大学出版会からみた出版事情について討論した。

討論の感想としては少し飛躍するが、上述のような学術論文の出版のあり様が改善されるために、図書館が誰に何をフィードバックしていくべきかが課題だと思った。編集コストを嵩ませる習慣は雑誌の存続に関わりかねず、その改善は、アクセスする読者の時間やコストの節約に繋がるからだ。

今回のセミナーではその他にも、OA 誌の会計事情の具体例を聞くことができた点でたいへん貴重な機会になつた。

～参加レポート 4～

電子リソースは今日の教育・研究活動において不可欠なアイテムとなりつつあるけれど、具体的なことは難しそうでよくわからない。ついつい敬遠したくなるが、多少なりとも理解を深めたいと地方開催(日帰り参加可)の SPARC セミナーに参加した。

多様な発表者からレクチャーの後、グループ討論形式というセミナーは新しい試みらしい。参加者の立場や理解度も多種多様で議論を発展させるのは容易でなかったと思うが、ファシリテーターの支援のもと、ここでしか聞けないざくばらんな話や意見もあったことだろう。初心者レベル

でどこまで理解できたか不安だが、どこでどのようなことがあるのか現状を知り、関連用語を耳にすることで勉強になったと考える。また、研究者と図書館関係者等との交流も、複雑な課題・問題を取り組んでいくうえで意義深いことである。今後多くの人の参加を期待したい。

-----**参加者から**-----

(大学/図書館関係)

- ・非常に興味深い、濃い内容でした。他の大学の状況も伺うことができ、大変有意義でした。
- ・COUNTER の活用方法を伺えたのが大変役立ちました。今後是非大学内で活用します。
- ・研究者の方とフラットな場で議論できたことが非常に貴重でした。研究者の方にとっての OA 誌投稿のインセンティブをお聞きできてよかったです。
- ・SPARC でディスカッションは初めてでしたが、とてもよかったです。
- ・EJ・DB 管理はどこの大学も同様の悩みを抱えていること、様々な工夫を試みていることがわかった。
- ・普段の図書関係のイベントと異なり、実際に研究者から OA についてのお話が聞けて、大変勉強になりました。
- ・NII 以外の場所で行ってくださると、とてもありがたいです。

す。グループディスカッションが大変有意義でした。

- ・研究成果の永続的な保存の担保など、図書館のあまり意識されていない役割についても、意識的な研究者の方もいるのだとディスカッションの中でわかり励まされる思いがしました。

(学協会/学術誌編集/関係)

- ・学術情報の受信者と発信者がディスカッションすることで、色々な情報を得ることができて有意義でした。両者の意見交換はとても重要と感じます。

(企業/学術誌編集/関係)

- ・年に 1 回か 2 回、京都で開催して欲しい。今回のようなディスカッションは参加者の声が聞けてとてもよかったです。ありがとうございました。

(その他/その他)

- ・双方向のディスカッションが新鮮でした。各講師の方々のプレゼンも素晴らしかった。

-----**企画後記**-----

冒頭でも触れましたが、今回のセミナーは聴講型ではなく参加型の企画として、SPARC セミナー史で初の試みでした。当初は懐疑的な意見もあった中で、開催まで漕ぎ着けられたのは、随所に NII コンテンツ課からの気の利いたサポートがあったからこそと思います。さらにファシリテーターとして、各分野で活躍する方々、また学術情報流通の主役である研究を本業とする方々が、立場等しく参加し、現役の証人として議論を盛り上げてくださったことも大変に重要な要素でした。この場を借りて参画してくださった各位に深く御礼を申し上げます。

物質・材料研究機構 谷藤 幹子

様々な分野の人がディスカッションに参加してくれて良かったです。この NewsLetter も内容が濃いので、得られた知識や情報をまとめ、次回以降につなげる工夫があるとよいです。

国立遺伝学研究所 有田 正規

参加者の声からも分かるように、「学術情報の受信と発信」という大きな課題について、身近に感じるということが実感できたセミナーでした。本セミナーの体験を踏まえて業務に生かしていくたいと感じました。

京都大学附属図書館 東出 善史子



■ 第5回 SPARC Japanセミナー 2013

「アジアを吹き抜けるオープンアクセスの風－過去、現在、未来－」

2014年2月7日(金) 国立情報学研究所 12階会議室 参加者:77名

オープンアクセスに関する議論は、ともすれば欧米が中心となりがちでした。これまでの SPARC Japan セミナーにおいても、アジアが主題として取り上げられたのは 2008 年 7 月に行われた「韓国コンソーシアム事情」の一回限りであり、2009 年度以降、日本以外のアジア地域を活動拠点とするスピーカーが登壇したことは一度もありませんでした。

日本でもすでに、海外との情報共有、海外への情報発信などが取り組まれているところです。さらに今後は、アジア地域との情報共有を進めていくこと、連携の可能性を探っていくことが必要ではないか。そうした視点から、今回のセミナーでは、SPARC Japan セミナー初の試みとして、アジア諸国から複数のスピーカーを招聘し、アジア地域のオープンアクセスの進捗状況に関して情報を共有するとともに、今後の連携の可能性を探ることを目指すことにしました。

今回のセミナーでは、韓国、中国、東南アジアの個別の状況、そしてアジア全域についての概況と展望について情報共有がなされました。まずは顔と顔を合わせてお互いの状況を知ることから、情報共有や連携協力の道筋ができていくのではないかと感じさせるものでした。

セミナーの概要は以下のとおりです。当日の配付資料、ドキュメントなど詳細は SPARC Japan のウェブサイトをご覧ください。[\(http://www.nii.ac.jp/sparc/event/2013/20140207.html\)](http://www.nii.ac.jp/sparc/event/2013/20140207.html)

講演

Institutional self-archiving について、この
10年間してきたこと、見聞きしたこと

杉田 茂樹(千葉大学附属図書館)

今から 10 年前、大学の教員に OA を紹介したところ、「電子ジャーナルってお金かかっているの？」と聞かれた経験がある。それから 10 年間、OA とその背景を理解してもらうため研究者との対話を続け、セルフアーカイビングの促進に努めてきた。現在、日本では 400 ほどの大学が機関リポジトリを設置しており、約 126 万件の文献が搭載されている。大学間で様々な情報共有を行なながら、学び合ってきた。しかしだ、研究者が日々生み出す論文のすべてが収載されているわけではなく、やるべきことは多い。アジア各国の状況を伺い、今後の活動に役立てていきたい。

OA Activities in Korea

Choi Honam

(Korea Institute of Science and Technology Information*)

韓国のゴールド OA

韓国では医学系分野が OA をリードしており、

KoreaMed や Synapse といったサービスが提供されている。自然科学系分野でも OA が進み、K-Pubs は出版のすべてのサイクルを統合しグローバルに発信できるプラットフォームだ。一方、人文社会科学系分野では、研究助成機関の NRF**が関心を高めているものの、OA への理解や関心は相対的に低い。

公的資金の助成を受けた研究成果を読むために購読料を負担しなくてはいけないことが韓国では不満を集めている。こうした研究成果への自由なアクセスを求める立法への動きが高まったが、関係者の消極的な態度で成立しなかった。ただし KNIH***の助成を受けた論文は OA とするよう保健福祉省が義務付けている。

韓国のグリーン OA

機関リポジトリのほとんどは国レベルの援助を受けており、KISTI や KERIS****などが分担してサポートしている。KERIS が直接設置したものは OAI-PMH(データの自動収集によってメタデータを交換するためのプロトコル)に準拠しているものの、他の多くは準拠していない。

また機関リポジトリの他に、
ロトコル)に準拠しているものの、他の多くは準拠していない。また機関リポジトリの他に、

* Korea Institute of Science and Technology Information: KISTI

** National Research Foundation of Korea: NRF

*** Korea National Institute of Health: KNIH

**** Korea Education and Research Information Service: KERIS

NRF の援助を受けた分野別リポジトリや、KISTI が構築し、5つの機関が参加している P-cube という学術データのリポジトリがある。

国内外での連携協力

国際的には SCOAP³* や WPRIM**などに参加、国内では文化・スポーツ・観光省をはじめとする中央省庁や研究助成機関との協力を進めている。

結論

ゴールド OA の課題は、全体的な OA への理解の低さ、図書館は理解しているが財政面やトップマネジメントの理解の低さなどによって行動できること、ステークホルダーの対立など構造的なものなどである。

グリーン OA に関しては、OA の義務化がまだほとんどされていないこと、OAI-PMH に準拠していないことなどが課題だ。また Open Government Data の課題としては、著作権や知的財産権について結論がはっきりと出でていないことがある。

今後の韓国で OA を牽引するのは KISTI などの国レベルのセンターであり、医学系分野だろう。コミュニケーション、コラボレーションを進めていきたい。

OA & IR in 2012: The University of Hong Kong & Greater China

David Palmer (The University of Hong Kong Libraries)

Knowledge Exchange 構想

香港大学の機関リポジトリ HKU Scholars HUB は 2005 年に立ち上がったが、2009 年に新たな取り組みとして Knowledge Exchange が始まり、機関リポジトリへの予算と関心が増大した。Knowledge Exchange の目的は、大学とコミュニティの「互恵」である。

背景として香港 8 大学が推進する Knowledge Transfer 構想があった。大学は、教育、研究に加えて、知識転化を行っていくことが求められている。香港大学は名称を Knowledge Exchange と変え、それを根拠として OA を推進している。

香港大学 Office of Knowledge Exchange の活動

香港大学図書館では、Institutional Repository ではなく Current Research Information System (CRIS) という名称に変更し、大学の戦略構想に位置づけた上で、あらゆる研究情報を収集、研究業績管理を進めていき、予算配分に役立てられるようにしている。

Office of Knowledge Exchange では他に、OA 出版や ORCID***などのプロジェクトを支援している。

* 高エネルギー物理学分野の査読付きジャーナル論文のオープンアクセス化の実現を目的とした国際連携プロジェクト

** Western Pacific Region Index Medicus: WPRIM

*** Open Researcher and Contributor ID: ORCID (世界中の研究者に対して一意な識別子を与えることを目指す国際的組織)

**** Hong Kong Institutional Repositories: HKIR

また香港大学では、2000 年に学位論文のリポジトリ掲載を義務化した。2010 年には図書館で OA ポリシーを、2011 年には知的財産権に関するポリシーを打ち出しているが、教授陣は無視している。そこで次のプランは、OA 論文をリポジトリに搭載すること自体を評価することである。学長交代もあり、今後に期待できるところだ。

中国全土の状況

香港では 8 大学すべて機関リポジトリを構築しており、HKIR****というポータルサイトを提供している。台湾でも機関リポジトリは盛んで、131 の機関リポジトリがある。義務化はしていない。中国本土では、北京大学が主導する機関リポジトリ機構 CHAIR や、中国科学院国家科学図書館による熱心な推進活動がある。2013 年 9 月の OA ウィークでは雲南省で中国 IR カンファレンスを実施した。



Open Access in Southeast Asia: Unresolved Issues and New Opportunities

Paul Kratoska (NUS Press, National University of Singapore)

東南アジアでは OA は確立されていないという前提に立つが、なぜ OA に対する関心が低いのか？もし東南アジアで OA がうまくいったら、どうなるだろうか？

基本的な情報

東南アジアには 900 から 1000 の大学があり、うち 40 大学ほどが研究大学とされている。東南アジアにおける研究の多くが中央政府からの資金援助を受けており、成果を明確に提示しなければいけない。東南アジアでは、評価の高い雑誌に掲載されなければ研究の価値も高いとみなされ、そうした雑誌に掲載されることが重要視されている。東南アジアにとって OA にすることはどのようなメリットがあるのかということを考える必要がある。

未解決の問題

• Article Processing Charge (APC、論文加工料) の問題：研究助成金で APC を払えるようにできるか。助成者はどの雑誌なら認めるのか。意思決定者はその分野の専門家ではないから、判断基準は難しい。APC をとることだけが目的となっているような “Predatory Journals” の問題もある。

• 研究の所有権の問題：企業で行われた研究成果は企

業に帰属するが、東南アジアでは、大学でも同様の方針をとることが多くなってきた。リポジトリに搭載するに際しては権利主体がはっきりしていないと難しい。

・人社系分野での OA 義務化についての問題：人社系では複数プロジェクトから成果を集めて出版したり、論文が長かつたりするなど、OA 化に難しさがある。現在の APC の相場ではコストをカバーできない恐れもある。

東南アジアの研究者は英語での発信に慣れていない人も多く、研究活動自体活発でない分野も多いので、OA のメリットが享受されるとはかぎらない。大学としてはメリットがあるかもしれない。

OA と東南アジアの学術出版の SWOT 分析

SWOT 分析(強み・弱み・機会・脅威についての現状分析)をしてみよう。特に機会。より多くの人がアクセスできるようになることが研究上どのようなメリットがあるのか。アジアの OA 出版は非西洋型パラダイムを開拓できるだろうか。東南アジアの大学では雑誌出版の助成をしているが、それにより APC を求めない OA 出版が実現できるのではないか。

アジア地域での協力が必要だと考えている。NUS Press は各国の大学出版会と個別に協力関係にあるが、もっと東南アジア域内協力が進めていけるないだろうか。



「アジア」の OA の将来

土屋 俊(大学評価・学位授与機構)

前提として、以下の 3 点を述べておく。1. OA はよいことだ。2. OA のビジネスモデルに関する議論はあったが、なんとかなる。3. OA が出てきて十数年が経ち、雑誌の価格に影響しないこともわかった。

結論は、アジアは科学技術生産力が増大しており、それゆえ論文出版も増える。大学図書館の予算がこれからどんどん増えるとは考え難い。論文が増えることに対して、その出版を誰がまかなうのかという問題が出てくる。

OA でやるしかない、ということだ。購読料をまかなうためのお金がもうない。ない以上は払えない。お金は払えないけれど出版したい。じゃあ自分で払う。それ以上の結論は出てこないのでないのではないか。



アジアの主要 8 国の研究開発 予算はアメリカを 越えているという 報道がある。それ にともない論文

数も増えている。ではその増えたものはどうするか。これは研究者と大学が考える問題だ。いまや、アジア地域内での OA の可能なモデルをいかに作るか、ということに問題は移っている。ひとつは、predatory でもなんでもいいから OA 雑誌にどんどん投稿するようにすることだ。もうひとつは、日本の J-STAGE というプラットフォーム、ここをアジアの方に使ってもらうということもあり得る。図書館に唯一できることは、機関リポジトリを「出版プラットフォーム」として再定義することだ。再定義したあと、図書館の仕事としては手放すもよし、手放さざるもよしであるが、そもそも誰がどう運営するかを大学ごと、大学図書館ごとにゼロから考えてもらうしかない。

パネルディスカッション

モデレーター：加藤信哉(筑波大学附属図書館)

パネリスト：Choi Honam / David Palmer / Paul Kratoska / 土屋 俊 / 尾城 孝一

はじめに尾城孝一氏からのプレゼンテーションが行われ、次にディスカッションが行われた。

日本の機関リポジトリ これからの 10 年を考える

尾城 孝一(国立情報学研究所)

日本の機関リポジトリ数は公開予定を含めると 487 機関。アメリカを越え、世界一位になる。

この間の反省点としては、「図書館」リポジトリにとどまってしまったこと。グリーン OA が進まなかつたこと。ポリシーが弱いこと。文献リポジトリ(紀要論文リポジトリ)にとどまってしまったこと。CSI 委託事業の成果が展開・普及できていないこと。

ここで改めて機関リポジトリの定義、意義について確認したい。古典的定義では「大学とその構成員が創造したデジタル資料の管理や発信を行うために、大学がそのコミュニティの構成員に提供する一連のサービス」(Clifford Lynch, 2003)。これまで図書館を介して情報がアクセスしてきたが、情報がデジタル化されると、図書館を介さずにアクセスできるというモデルが成立してし

まう。そこで、学内で生み出された教育研究の成果を集めて組織化、コレクションして発信するといふこれまでの逆の流れが産み出された。

2013 年の 10 月から、大学図書館と NII の連携協力の枠組みの中で「機関リポジトリ推進委員会」が立ち上がった。機関リポジトリ推進委員会では「大学の知の発信システムの構築に向けて(戦略的重点課題)」(通称「竹橋宣言」としてポリシー、システム基盤、コンテンツ、人の 4 点を取り上げ、推進していくとしている。

機関リポジトリをもっと教員の身近におくこと、教育や研究のワークフローの上に、研究者の動線の上に位置付けるシステムが必要だろう。それによってクリフォード・リンチの定義が実現されるのではないか。

そして、アジアの国々との連携については、これまでの日本の経験や知見をアジアの国々に広めていくことが責務ではないか。たとえば最近、マレーシアのワウサン大学で WEKO を使用してシステムをつくるプロジェクトが始まっている。こうした活動を積み重ね、機関リポジトリを通じた OA を広めていければよいと思う。

ディスカッション



言語の問題

Kratoska 氏から、OA 化に際して言語による違いを埋めていくための橋渡しはどうしたらよいか、という問題提起があった。Palmer 氏からは、Google 翻訳などの機械翻訳を使えばよいし、英語で出版するように各国で言っているとの指摘があった。Kratoska 氏は、英語での出版を強要することが二層化を進めてしまいかねないという危険性を示唆し、東南アジアでも英語で教育されている国であれば論文出版が容易だが、それ以外の国では難しいことが述べられた。これに関して Choi 氏からは、データベース搭載の文献をオンデマンドで翻訳してもらえるという翻訳プロジェクトの紹介があった。

APC の問題

Kratoska 氏から、OA になると図書館が支払う金額は少なくなるのかどうかという問題について、Duke 大学の調査結果では実はジャーナル購読料よりも高くつくという結果があることが紹介され、大学全体で支払うコスト

は今までより高くなる可能性があることが指摘された。

セミナー参加者のリポジトリ経験

会場内に対して、「ここにいる何人が機関リポジトリで論文を読んだことがあるか」「ここにいる何人が機関リポジトリに論文を登録したことがあるか」と問い合わせたところ、会場内のほとんどが機関リポジトリで論文を読んだことがあり、また、会場内で論文執筆経験がある人のほとんどはリポジトリに論文を登録したことがあることがわかった。

OA の推進力

Palmer 氏から、成功例として NIH* の PubMed Central が挙げられた。搭載率は 80% を越え、その成功の秘訣は搭載しない場合は助成金が与えられないという仕組みにしたからであるとの説明があった。これに対して土屋氏からは、実際に搭載しているのは研究者自身ではなく出版者が行っているなど、その仕組みだからうまくいっているというのはひとつの「神話」ではないかという指摘があった。

Kratoska 氏からは、研究者を説得することは不可能であると考えた方がよく、大学の管理者や研究助成機関が要件としてセルフアーカイブを求めるということに尽きる、との発言があった。土屋氏からはそれに対して、研究者としてはそれに反対で、そのような強制のもとにおかれることは健全な研究推進とは言えないのではないかとの意見が述べられた。

さらに、Choi 氏からは、韓国の KAIST** で機関リポジトリと業績管理システムをリンクさせた事例のようにトップが機関リポジトリ推進の意思がないうまくいかないのではないかという意見が述べられた。

Kratoska 氏からは、ノーベル賞をとったある研究者が、「自分が今若い研究者であつたらこのような成果は挙げられなかっただろう」(今の若い研究者は出版に追われていて、一生かかるような研究はできないだろう)と述べたことが紹介された。

モデレーターの加藤氏から、トップダウンで政策的にやるのがよいという主張と、研究というのはそんなものではないという主張、北風と太陽のような二つの主張であるとの感想が述べられた。

これからのアジアでの協力関係

Choi 氏からは、OA についてはまずコンセンサスが必要であり、そして、やっていこう、という意思が必要であるが、最初は政府が法律などである程度のレベル(クリエイカルマス)に達するまで強く推進することが必要とのコメントがあった。

* National Institutes of Health: NIH

** Korea Advanced Institute of Science and Technology: KAIST

Kratoska 氏からは、大学出版局と他の出版社との協力を提案する際、何度も同じ出版社を訪ねてお互いによく知りあつていき、そしてはじめて、では何かと一緒にやりましょう、ということになる。地域として何かをやっていくことなら、お互いをまずよく知り、そして大きな方

針というよりも小さな協力を積み重ねていくことが大事だというコメントがあった。そして、そのような小さなステップのひとつが、今日のこのセッションではないか、としてこのセミナーに対する感謝の意が表された。

以上をもってパネルディスカッションが終了した。

-----**参加者から**-----

(大学／図書館関係)

“各国の OA の現状、ポリシーがわかつて有意義でした。ひとくちにアジアといつても様々にある。共通する点と差異が面白かったです。中国本土が規模的に気になる。” “アジアのリポジトリ、OA の現状をお聞きでき勉強になりました。発展するアジアの国との共同研究、留学生の研究などもあり、OA が広がっていくことを願いたいと思います。まずは自分の役目をこなしていくことが大切だと思います。”

“焦点がより絞られているとよかったです。得られた情報はそれぞれ有益だったと思います。”

(大学／図書館関係／教育関係／研究者)

“クラストスカさんの最後のコメントにあったように、アジア

における協力体制を実現するには、たがいに知り合う機会をつみかさねていくことが大切だと思う。”

(企業／学術誌編集関係)

“セミナー全体を通してコンセプトや目標が不明瞭だった。機関リポジトリと OA の関係性が不明瞭だった。まだ明確でないためにそうなったのかもしれないが。全体のオーガナイズでもう少し改善できたのでは。ディスカッションでも、何についてディスカッションしたいのか目標がよくわからなかった。”

(大学／研究者)

“末尾に尾城さんからもお話をましたが、再びアジアの方々をお招きして、今度はトピックを絞って何かあれば。”

-----**企画後記**-----

😊 今回の企画では、韓国・香港・シンガポールの三ヵ国から、政府機関研究者、大学図書館関係者、大学出版会担当者とそれぞれ違う立場の方にご登壇頂き、各國・地域における現状をそれぞれの立場から論じて頂く盛りだくさんの企画となった。香港・シンガポールは、英語によるアジアに関する学術情報発信のハブでもあるので、今後日本を、そして東アジアを越えた連携を考える上では、重要な場所となるだろう。ご参加頂いた皆さんに、アジアの多様性を面白いと思って頂けるセミナーとなつていれば、企画側としては幸いである。

北村 由美（司会・京都大学附属図書館研究開発室）

😊 アジアのオープンアクセスというテーマで企画するのはなかなか難しい。まず、オープンアクセスと言っても実際に多様であるし、アジアも多数の国を含み、ひとまとめに論じることはやや無理がある。その中で、選んだ国のそれぞれの実情についてお話を聞いて頂くことになったが、それ

はそのまま、各国の多様性を反映した内容となった。強いて焦点を当てるにあたって改めてセミナーを振り返ると、異なる立場からの豊富な事例紹介、各國の大学事情や研究事情など、興味深いセミナーであったように感じられる。まずはお互いを知りあうこと、そして小さなステップを通じて協力を積み重ねていくことという Kratoska 氏のコメントが印象に残った。

内島 秀樹（筑波大学附属図書館）

😊 このニュースレターをまとめるにあたって改めてセミナーを振り返ると、異なる立場からの豊富な事例紹介、各國の大学事情や研究事情など、興味深いセミナーであったように感じられる。まずはお互いを知りあうこと、そして小さなステップを通じて協力を積み重ねていくことという Kratoska 氏のコメントが印象に残った。

松原 恵（東京大学情報システム部）

SPARC Japan 事務局より

SPARC Japan は今年度から第 4 期に入り、「国際連携の下でのオープンアクセスの推進、学術情報流通の促進および情報発信力の強化」に取り組むことを基本方針に、大学図書館と研究者の連携を促進し、オープンアクセスの諸課題に対応するための調査活動やセミナー活動を行っています。本ニュースレター紙上で、調査の成果や最新の海外動向を伝えてまいります。また、OA Week の 10 月 21～22 日にオープンアクセスサミット 2014 の開催を予定しています。（SPARC Japan 事務局 高橋菜奈子）

国際学術情報流通基盤整備事業（SPARC Japan）年報
—平成 25（2013）年度—

平成 26 年 7 月

発行 大学共同利用機関法人 情報・システム研究機構
国立情報学研究所 学術基盤推進部 学術コンテンツ課

〒101-8430 東京都千代田区一ツ橋 2 丁目 1 番 2 号
TEL 03-4212-2351
FAX 03-4212-2375
E-mail sparc@nii.ac.jp
